奈良教育大学

令和６年度　陸前高田市文化遺産調査報告書

令和７年３月

奈良教育大学 ESD・SDGs センター

はじめに

奈良教育大学 学長　宮下 俊也

奈良教育大学の学生及び教員による「陸前高田市文化遺産調査」は、陸前高田市の一市民から文化庁に寄せられた東日本大震災による被災を免れた同市の文化遺産に対する調査依頼がきっかけとなり、本学の山岸公基教授を中心に仏像調査をさせていただいたことから始まっています。その後、コロナ禍による中止があったものの、昨年度までに 11 回の調査活動が重ねられてきました。

本年度は、9 月 10 日～13 日にかけて山岸教授と大西浩明特任准教授とともに６名の学生が参加し、「文化財調査班」と「ESD 防災班」に分かれて活動を行いました。

本学は、奈良の地にある教員養成大学として、「学芸の理論とその応用とを教授研究することにより、豊かな人間性と高い教養を備えた人材、特に有能な教員を養成して、我が国の教育の発展・向上に寄与すること」を社会的使命としています。また、ユネスコスクールとして、「人・環境・文化遺産との対話を通した教育の追究」、「持続可能な社会づくりに貢献できる教員の養成」、「教員養成と教員研修の融合」を３つの柱として掲げています。

これらのことは、キャンパス内での教育・研究だけで実現できるものではありません。キャンパスで学んだことを教育現場や社会に対していかに提供していくか、また逆に、フィールドでの経験や学びをいかに教育実践や研究に生かしていくかが、きわめて重要です。この「陸前高田市文化遺産調査」は、陸前高田市の多大なご協力により、遠く離れた奈良で教員を目指す学生に、被災の現実から文化遺産と防災についての学習機会を与えてくださっているものであり、ご関係の皆様に対し、あらためて深く感謝申し上げる次第です。

学長として強く願っていることは、この調査が学術的な研究だけで終わるのではなく、むしろそれ以上に、陸前高田やそこで暮らしておられる人々を思い、人と社会を愛し、「心の復興」に貢献できる教員として育っていってほしいということです。これは参加学生だけでなく、「人たる教員」として成長していくことを、本学のすべての学生に期待するものです。そのためにも、この調査報告が貴重な事例として共有されていくよう努めて参ります。

令和７年３月

目　次

はじめに		…… 1
令和６年度　陸前高田市文化遺産調査概要報告		…… 3
自分事として考える減災教育を目指す	中本篤志	…… 13
陸前高田文化遺産調査団で学んだこと	苗代昇妥	…… 15
陸前高田市文化財調査団に参加して	広野祥子	…… 17
旧気仙郡伝来の古仏に接して	山本隆萬	…… 19
令和６年度文化遺産調査に参加して	金川恵人	…… 21
陸前高田市調査団に参加して	谷山陽輝	…… 23
陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発（12）		…… 25
地域自主防災訓練開催要項（案）		…… 31
子ども教材		…… 35
仏像調査報告		…… 37

令和6年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

ESD・SDGs センター　大西　浩明

1．目的

2011 年の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約 1 割にあたる人命が失われたほか、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、2012 年度より 11 回にわたって本調査団を派遣してきた（2020 年、2021 年はコロナ禍によって中止)。この間、文化財調査やそれをもとにした教材作成を進めるとともに、被災地の復興状況を視察し、被災された方からの聞き取りやボランティア活動などを通して、ESD の理念に基づいた防災教育に資する教材作成を行うなど、大きな成果を得てきた。本年度は、これまでの成果をさらに深めるため、本調査団を組織し実施する。

2．実施日　　令和６年９月１０日（火）～１３日（金）

3．参加者　　教職大学院生：中本篤志（ESD 防災）

学部生　：広野祥子、金川恵人、山本隆萬（文化財調査）

苗代昇妥、谷山陽輝（ESD 防災）

大学教員：山岸公基（文化財調査)、大西浩明（ESD 防災）

4．宿泊地　　民宿吉田（陸前高田市米崎町松峰 110-5）

5．日程・活動

９月１０日（火）

7:15	伊丹空港南ターミナル集合
8:00	ANA731 で仙台へ
9:15	仙台空港着 →　レンタカー借り上げ
10:45	仙台市博物館【仙台市青葉区川内 26】 特別展「親鸞と東北の念仏―ひろがる信仰の世界」 仙台城本丸跡見学。 各自昼食
13;30	駐車場に集合、出発 経路で車窓から多賀城・津波到達点見学
16:00	陸前高田市教育委員会表敬訪問 【陸前高田市高田町字下和野 100】
17:30	民宿吉田着

【仙台市博物館】

2023 年は浄土真宗の開祖・親鸞（1173～1262）の生誕から 850 年を迎え、また、2024 年は親鸞が主著『教行信証（顕浄土真実教行証文類)』を著してからちょうど 800 年となるという。親鸞は常陸国南部（現在の茨城県笠間市周辺）を拠点として長く活動し、多くの門弟に教えを授けた。門弟の中には東北地方へ教えを

仙台市博物館

広げた者がおり、以後の浄土真宗の歴史において、東北の門弟たちは幾度も重要な役割を果たした。この日から開催された特別展「親鸞と東北の念仏ーひろがる信仰の世界ー」では、浄土真宗各派の本山や東北各県の寺院などに伝わった文化財を通じて、東北における浄土真宗の展開について紹介されていた。

【仙台城本丸跡】

本丸跡

伊達 62 万石の居城、仙台城（青葉城）。標高約 130m、東と南を断崖が固める天然の要害に築かれた城は、将軍家康の警戒を避けるために、 あえて天守閣は設けなかったといわれている。本丸跡に、大広間の発掘調査で確認された礎石跡の位置に新たな礎石を配置し、当時の建物規模や部屋割りを表現している。本丸大広間は、本丸御殿の中心となる建物で、その広さから「千畳敷」とも称されたといわれている。内部には、伊達政宗をはじめとする歴代藩主の座する「上段の間」をはじめ、「孔雀の間」「檜の間」など多くの部屋が配置され、部屋の周囲には板敷の縁が巡っていた。

【陸前高田市教育委員会表敬訪問】

山田市雄教育長、千葉達教育次長、松坂泰盛博物館前館長にご同席いただき、約 40 分表敬訪問をさせていただいた。派遣団員の自己紹介のあと、山田教育長からは、これまでの 12 年間にわたる文化遺産調査等に対して奈良教育大学へ感謝の言葉をいただくとともに、今回の調査・研究に大きな成果が得られるようしっかりと学んでほしいという激励をいただいた。また、教育長自身の震災時における様子や、その後の町の復興に向けての様々な取組について語っていただいた。その中で、町の復興は一昨年の博物館開館をもって終了したが、「心の復興」にはまだまだ程遠いというお話が印象的であった。

その後、7 階展望ルームで松坂氏より、市内の被災状況や復興状況などについてご説明いただいた。愛宕山を切り崩し、平均 10ｍのかさ上げをした市街地には、新たな防潮堤が完成し、様々な公共施設も再開したが、なかなか人が戻っていないという言葉に「心の復興」に程遠いと言われた教育長の言葉が重なった。

山田教育長から激励の言葉をいただく

市役所 7 階展望ルームにて

9 月 1 1 日（水）

文化遺産班		ESD 防災班	
8:30 出発			
9:00	常膳寺調査 【陸前高田市小友町字上の坊 24】	AM	文化遺産班に帯同 常膳寺調査に協力

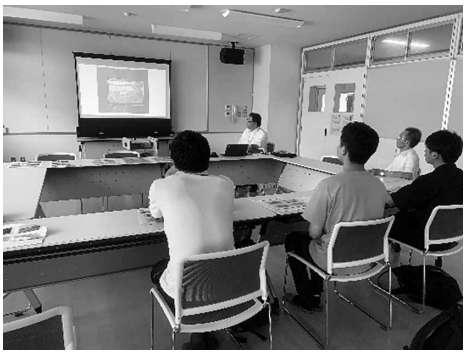
		13:30	陸前高田市立高田小学校 校長　佐藤　健氏より講話 @陸前高田市立高田小学校
		15:00	【陸前高田市字太田 510】
15:30	合流		
16:00	東日本大震災津波伝承館見学 陸前高田市内の震災遺構等の見学 タピック 45、奇跡の一本松、旧ユースホステルなど		
17:30	民宿吉田着		

【常膳寺調査】
・常膳寺千手観音立像の写真撮影
・常膳寺千手観音立像の調査報告書修正用データ収集(再検討)
　→常膳寺千手観音立像の実測、形状・品質構造記述
（・常膳寺千手観音立像の熟覧）

千手観音立像の調査

特別なシートも活用したが、大きく重い仏像を慎重に動かすには、多くの人手が必要であると感じた。なかなか見ることができない背面を見る貴重な機会でもあった。

【講話「東日本大震災からの学校再開」】講師：陸前高田市立高田小学校　校長　佐藤健氏


佐藤健氏の講話

佐藤氏は震災当時、小友中学校に勤務。翌日に卒業式を控え、式の準備をされていたそのときに地震が起こった。生徒とともに高台に避難したが、その後 18m を超える津波によって、体育館は壊れ、教室も使用不能となる。全生徒 60 名のうち、８名が死亡。１年生６名、２年生２名、いずれも翌日卒業生に渡すプレゼントや、バレンタインデーのお返しを買うため市街地へ出向いていて津波の犠牲になったそうである。指定避難場所の市民体育館へ避難したもののそこで被害に遭った。佐藤氏のご家族は奥様、お子様は無事だったものの、当時高校３年生の娘さんは家に残っていて市役所に避難し、市長らとともに夜を明かしたという。「死を覚悟し、どうすれば痛みなしに死ねるか」と考えていたそうである。

陸前高田市では、死者・行方不明者 1757 人で、津波浸水区域の人口中の犠牲率が 10.64%に及ぶ。教育委員会も、教育委員長、教育長、教育次長、学校教育課長ら多くの職員を失い、指導主事は２名だけ残っただけで一時的に機能不全に陥った。学校再開に向けては、通学路も寸断されており、全く見通しの立たない状況だった。

学校再開に向けて

１．通常の教育活動を行う場の確保

（１）間借りする小友小学校の整備（がれき撤去や清掃、消毒など）

教室整備には、自衛隊・都庁職員・個人のボランティアなど様々な人が手伝ってくれた。真っ先に手伝ってくれたのは地元の消防団員だった。遺体捜索や道路確保のための様々な仕事をした上で

やってくれた。「学校が元気にならないと地域が元気にならない！　ここは俺たちの学校だもの当たり前だ！」　『地域とともにある学校』を痛感した。　　4月22日始業式、23日入学式

（2）教材・教具・備品の整備

公的支援では間に合わないので、支援者に対して直接支援を訴えた。たまたま校長と知り合いだった神奈川県の教員でつくっている支援団体から物的な支援をいただいた。

2．通常の教育課程の提供

十分な教育環境が確保できない中で、生徒には通常の学習内容を保障しなければならない。
限られた教材教具での学習指導、通常より3週間遅れた授業時数の確保、学校行事の精選。
そんな中で、5月22日に運動会を実施した。その目的は次の通り。

・非日常的な教育活動を続けている日々の中で、いわゆる通常の行事を行うことで日常的な感覚を取り戻す。
・地域によって生かされていることを自覚するとともに、元気な姿を示すことで地域の方々にも元気になっていただく。
・自分たちの力で運動会を成功させることで、津波によって被災した中でもできることがたくさんあることを学ぶ。

通常よりも縮小した形ではあったが、雨が心配される中、保護者の協力によって実施できた。

3．心のサポート

1）心のサポート授業　～リラクゼーション、絆を深めるエクササイズ

7月　「大震災をふり返る」非公表の作文　→　10月「大震災を伝えよう」文化祭で公表
名古屋まつりで構成詩発表

2月　被災校舎とのお別れ会　　亡くなった生徒への別れの言葉　　3月　校内追悼式
「震災と向き合い、今を強く生きる」

2）個別面談

3）生徒のカウンセリング　～カウンセラーの配置

4）心のケア研修会　～教職員

5）保護者向けカウンセリング

私自身の震災からの教訓

・経験の逆作用（2日前の地震で津波警報が出たが50㎝程度だった）
・想定外の想定の欠如（市民体育館は避難所に指定されておりハザードマップの想定外だった）
・正常性バイアス（目の前で大津波を見ているのに我が家は大丈夫と考えていた）
・同調性バイアス（亡くなった8名はだれも高台へとは言わなかった。みんなで逃げれば怖くない）
・教員たるもの、防災に関する知見を磨け（防災士、危機管理エキスパートなど様々な資格を取得）

「いわての復興教育」について

震災・津波を乗り越え、未来を創造していくために、10年後、20年後の岩手県を支えていける子どもの育成を目指し、各学校で新しい防災教育、体験（教訓）から学ぶ教育活動に取り組んでいる。

「生命や心について『いきる』」、「人

「いわての復興教育」副読本

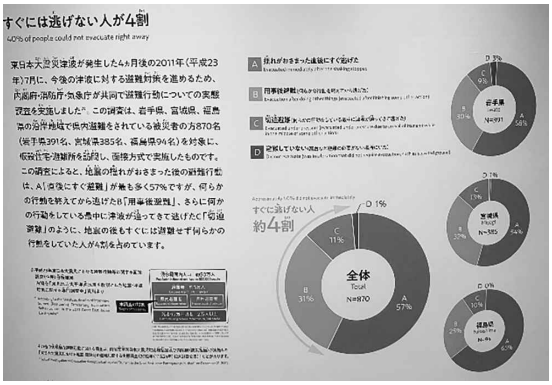
や地域について『かかわる』」、「防災や安全について『そなえる』」という３つの教育的価値と具体の 21 項目を提示し、各学校でそれぞれに合った全体計画を作成している。高田小学校では、「つながる　つなげる　高田学」をテーマに、地域の人や文化、産業、歴史、自然を学び、ふるさとの未来を考えることをねらいに様々な学習を展開している。

陸前高田市の防災教育の成果と課題

○各校とも自校に合った防災教育を積極的に展開している。
○地域の資源（津波伝承館、震災遺構、語り部、NPO 等）を積極的に活用している。
○子どもたちが地域を愛し、積極的に関わろうとする態度が育成されている。　　など。
●市全体としての防災教育の取組となっておらず、取組に差が出てきている。
●防災教育に熱心な教員が異動すると、計画当初の思いとは異なる取組になりがちである。
●被災経験が強い教員は語りたがらず、被災経験がない教員はどう取り組むべきか分からないでいる。
●小学生は全員震災後に生まれた子であり、被災意識がない。一方、保護者はその多くが被災者であり、その中でいかに伝承していくか、校長によってその思いも異なり、市として方向性が出ていない。

【東日本大震災津波伝承館見学】

「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」という４つのゾーンからなっており、被災した実際の物、被災現場をとらえた写真、被災者の声などを展示しているだけでなく、津波のときの人々の行動をひもとくことで命を守るための教訓を共有しようとしている。特に、人々がそのときどのように考え、どんな行動をとったのかというところに全員が大きな興味をもった。



すぐには逃げない人が４割

「３ｍなら大丈夫」、「３階に上がれば大丈夫」といった、それまでの自分の経験から「正常化のバイアス」が働いたであろう人々の言葉が数多くあり、直前に聞いた佐藤氏の話と重なった。危機感をもってそのときに対処することがいかに大事であるかを改めて感じた。

【陸前高田市内の震災遺構見学】

奇跡の一本松にて

いずれも津波の威力のすさまじさを感じざるを得ない。特に、津波の高さには圧倒される。「道の駅タピック４５」の最上部、気仙中学校の屋上部分まで津波が来たということを、実際に目の当たりにして、そのすごさに改めて恐怖を感じてしまう。

津波伝承館周辺を歩くと、新たに高さ 12.5ｍの防潮堤が完成し、気仙川にも大きな水門が完成している。かさ上げも終わり、町は復興しつつあるが、いかにハード面は整備されても、大切なのは人々がそのときにどのように行動するのかというところの一点である。その意味からも、今回の参加者が取り組もうとしている「自分ごとになる防災・減災教育」というテーマは、どこの地域においても大切な視点であり、汎用性のあるものであると考える。

9月１２日（木）

文化遺産班		ESD 防災班	
9:00	向堂観音堂（浄福寺）調査 【気仙郡住田町世田米清水沢 74】	10:00	大船渡市津波伝承会 【大船渡市大船渡町字茶屋前 7-6】 講話
13:00	長谷寺調査 【大船渡市猪川町字長谷堂 127】	13:30 15:00	大船渡綾里漁業協同組合 【大船渡市三陸町綾里字中曽根 66】 漁協、市水産課の方から聞き取り
15:30	合流		
16:00	陸前高田市立博物館見学		
17:30	民宿吉田着		

【向堂観音堂（浄福寺）調査】

・向堂観音堂(浄福寺管理)十一面観音坐像の撮影

・向堂観音堂(浄福寺管理)十一面観音坐像の調査報告書修正用データ収集(再検討)

→向堂観音堂(浄福寺管理)十一面観音坐像の実測、形状・品質構造記述

(・向堂観音堂(浄福寺管理)十一面観音像の熟覧)

向堂観音堂（浄福寺）

【長谷寺調査】

・長谷寺聖徳太子立像の撮影

・長谷寺聖徳太子立像の調査報告書作成用データ収集

→長谷寺聖徳太子立像の実測、形状・品質構造記述

(・長谷寺聖徳太子像の熟覧)

長谷寺収蔵庫

気仙三十三観音二十二番札所。東北地方最古級とされる木造如来座像と県指定の重要文化財の木造十一面観音菩薩立像を有する。

【大船渡市津波伝承会での講話「あなたに助かってほしいから」】

大船渡市津波伝承会代表　斎藤賢治氏

齊藤賢治氏による講話

齊藤賢治氏は、東日本大震災の被災経験をもつ語り部として活動されており、大船渡津波伝承会の代表でもある。大船渡津波伝承会は東日本大震災津波襲来時の映像や津波前後の写真展示のほか、齊藤氏から、当時の様子や自身が助かった経緯など実際の体験談を直接聞くことができた。

大船渡市の三陸沿岸は大体 20～30 分も歩けば小高い丘に上がることができる地形である。しかし、大勢の方が亡くなってしまった。そこには、正常性バイアスがかかり、逃げなかった人が多かったという。命の危険が差し迫ったときほど人は、「どうせ大丈夫だろう」といつも通りの行動をしてしまう。そして、

家族の安否を確かめに津波が来る海に向かってしまうのだという。実際に地震発生後、海に向かって家族の安否を確認する車や自宅へ帰ろうとする車の渋滞が発生していた。齊藤氏は、当時製菓会社の専務であり、会社でも震災前から「地震だ！津波だ！さあ逃げろ！」の注意喚起を行っていた。さらに、自宅の家具転倒防止器具の取り付けや水やそのタンク、食料の確保など、自助の備えを怠ることはなかった。そこには、地震や津波発生時には、「どこにどうやって、どんな手段で逃げるのか」を普段から想定し、いつかくるという意識の高さがあったからだ。

最後に「津波てんでんこ」の話もされた。それは、「津波が来たら、いち早く各自てんでんばらばらに高台に逃げろ」というものである。「みんな逃げていることを信じ、自分も必死に逃げる」ということだと齊藤氏は語っていた。さらに、地震や津波に対して正しい知識と適切な判断を知ることで、自助につながるのだと続けておられた。我々に対しても、熱く「助かってほしいから」という思いを込めて語られていた。地震や津波に対する正しい知識をもち、普段からの危機管理と、それに応じる当たり前の行動や訓練を積み重ねていくことの重要性を再認識することになった。

【大船渡綾里漁業協同組合での聞き取り】

岩手県漁業士会会長　佐々木淳氏、綾里漁業協同組合総務課長　佐々木伸一氏

大船渡市水産課振興係長　佐藤直司氏、同主任　葉澤芳行氏

綾里漁業協同組合にて

まず、平成 21 年～令和 5 年の 15 年間にわたる漁協の取扱販売実績と定置網水揚げ実績の資料を提供いただき、震災前後の状況についても詳しく説明していただいた。

我々の「震災のときどんな気持ちでしたか？」という素朴な質問に対して、「いずれいつかは来るものだと思っていたから。」と言われた言葉にハッとした。綾里地区は、明治三陸津波で国内最高の 38.2ｍの津波に襲われ、1000 人を超える犠牲を出し、昭和三陸津波でも犠牲者は出たが、これまでの教訓を生かし、それ以後住民のほとんどが高台に移転した。そのため、東日本大震災では 25ｍの津波に襲われたが人的被害がゼロだった。「いずれいつかは来るものだと思っていたから。」というのも、教訓がきちんと引き継がれているからこそなのだろう。

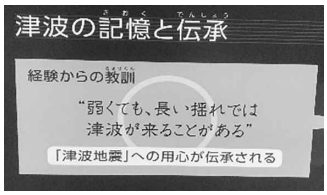
だからこそ、そこからの漁業の復旧・復興も目覚ましい。地震の翌日には漁具を拾い集めていたという。行政の対応を待っていられないと、生産者と漁協が協力して、全国のつてを頼って物的・金銭的支援をもらいながら急速に復興していった。行政を頼っていては「元通り」にしかならない。どうせゼロからつくるなら前よりいいものをつくるという信念に、地元行政がついていったという感じである。それができたのも、震災以前から生産者と漁協が一体となって、ワカメやホタテなどの養殖に真摯に取り組み、生産者主体の経営を漁協が推進してきたこと、全国の支援者と顔でつながる関係を築いてきたことが大きな要因であるとうかがった。

三陸沖は世界に誇る漁場と言われてきたが、近年獲れる魚種も変わってきたという。サケは、平成 26 年には 12 万尾獲れていたのが年々減少し、令和 5 年はわずか 10 尾である。秋サケは三陸沖には来ていないという。また、漁業従事者の問題も深刻で、外国人労働者やＩターンの若者を積極的に受け入れているという話を聞き、防災とは関係ないが、持続可能な漁業について考えさせられる機会となった。

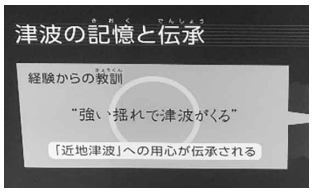
【陸前高田市立博物館見学】

東日本大震災により施設は全壊し、資料も壊滅的な被害を受けた。被災した資料については、全国の専門機関の協力を得て、約 56 万点のうち約 46 万点を救出し、それらに対する安定化処理及び修理作業を継続している。被災した博物館は、同じく東日本大震災により壊滅的な被害を受けた海と貝のミュージアムと合築して新設し、発災から約 11 年 8 カ月後の令和 4 年 11 月に開館した。陸前高田の民俗資料や漁具なども多数展示しているが、「宿命とともに生きる」というコーナーが印象的である。明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波からどのよう教訓を得てきたかが分かりやすく掲示されている。

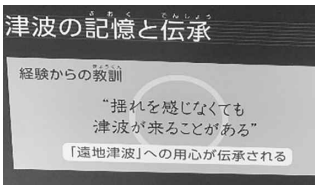
「オエベス様」の模型



明治三陸津波から



昭和三陸津波から



チリ地震津波から

デジタルマップの作成を体験

※19 時より、開発管理技術研究所代表　須藤直俊氏からデジタルマップの作成・活用についてのお話をうかがった。自分たちが調べたことを画面の地図上に自由に挿入したり、そこにリンクを貼ったりしてオリジナルのデジタルマップを作成できる点や、その作業を各自の端末を利用して同時にできる点など、授業において大いに活用できるものであると感じた。一人 1 台端末を持って学習している現在の学校現場においては、様々な教科や活動において、これの活用の可能性を感じることができた。

9 月 1 3 日（金）

8:10	宿舎発
9:00	東川院【一関市大東町渋民小林 35】
10:20	平泉世界遺産ガイダンスセンター【平泉町平泉字伽羅楽 108-1】
11:00	平泉文化遺産センター【平泉町平泉花立 44】
12:30	中尊寺【平泉町平泉衣関 202】
14:20	毛越寺【平泉町平泉字大沢 58】
15:10	西光寺（達谷窟毘沙門堂）【平泉町平泉北沢 16】
15:40	出発
17:50	仙台空港着　→　レンタカー返却
18:55	ANA740 で大阪へ
20:20	伊丹空港着　　解散

【東川院】

木造観音菩薩坐像

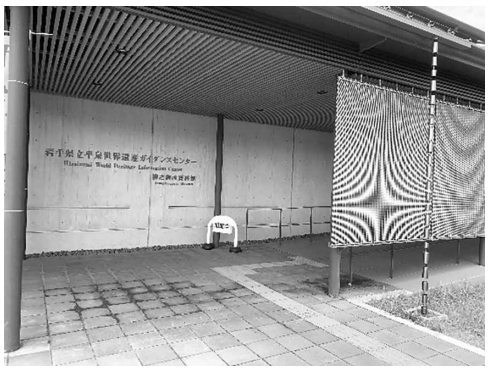
明治の廃仏毀釈により、渋民にあった長寿寺・観音寺が荒廃したが、三つの寺院が一つとなり再興され現在に至る。国指定重要文化財「木造観音菩薩坐像」は、平安末期の彫刻様式を示す観音坐像で、奥州平泉において藤原三代による寺院造営に携わった仏師の手になると推定される。

この観音菩薩坐像が、約２年の大規模修理を終え、今年の３月に戻ってきたという。今回の修理では、変色していた過去の修理による塗装を剝がし、隠れていた金箔が姿を現した。左頬や胸には制作当初の金箔も一部残っていた。首周りの厚塗りを剝がしたことなどにより、やや引き締まった表情に見えるという。今回、月に一度しか拝観できないところを特別に開けていただき、拝観することができた。

【岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター】

世界遺産「平泉」の価値を広く世界中に伝え、人類の共通の財産として後世へ継承するための拠点となるべく、令和 3 年 11 月に開館した。

仏国土の世界観を映像で投影するプロローグシアター、復元された「平泉館」のジオラマ、柳之御所遺跡から出土した重要文化財など、平泉の文化遺産の価値や、平泉の歴史、平安時代の生活の様子を展示・解説している。柳之御所史跡公園内に設置されており、奥州藤原氏の政庁である柳之御所遺跡を見学できる。



ガイダンスセンター入口

【平泉文化遺産センター】

平泉文化遺産センターのエントランス

世界遺産に登録された資産を含めた“平泉の文化遺産”の魅力を、パネルや映像などでわかりやすく紹介しているガイダンス施設である。町内の遺跡発掘で出土した土器等の展示もあるが、メインは奥州藤原氏を中心とした平泉の歴史に関する解説パネルで、中尊寺や毛越寺を見学する前に予習として見ておくと分かりやすいと感じた。

【中尊寺】

中尊寺は嘉祥 3 年（850）、比叡山延暦寺の高僧慈覚大師円仁によって開かれた。その後、12 世紀のはじめに奥州藤原氏初代清衡公によって大規模な堂塔の造営が行われた。奥州藤原清衡の中尊寺建立の趣旨は、11 世紀後半に東北地方で続いた戦乱（前九年・後三年合戦）で亡くなったすべての霊を敵味方の別なく慰め、「みちのく」といわれ辺境とされた東北地方に、仏国土という平和な理想社会を建設するというものであったと言われる。実際、源氏政権が攻め入るまで、平泉はおよそ 100 年近くにわたって繁栄し、みちのくは戦争のない「平泉の世紀」だった。

現存する唯一の創建遺構である金色堂は、三間四面の小堂ながら平安時代の漆工芸、金属工芸、仏教彫刻の粋を凝縮したものであり、また奥州藤原氏の葬堂として日本史上に独特の位置を占めてきた。第二次大戦後、法隆寺金堂壁画の焼失をきっかけとして文化財保護の機運が高まるなか、「文化財保護法」が制定され、金色堂は国宝建造物第一号に指定される。昭和 25 年（1950）には金色堂須弥壇の内に 800 年の間安置されてきた藤原四代公の御遺体の学術調査がおこなわれた。この調査によって四代公の人種、年齢、死因、身長や血液型など多くのことが判明した。また多数の副葬品のなか、四代泰衡公の首桶から発見されたハスの種が平成 10 年開花に成功し、「中尊寺ハス」として初夏には清楚な花容をみせてくれる。

中尊寺金色堂

【毛越寺】

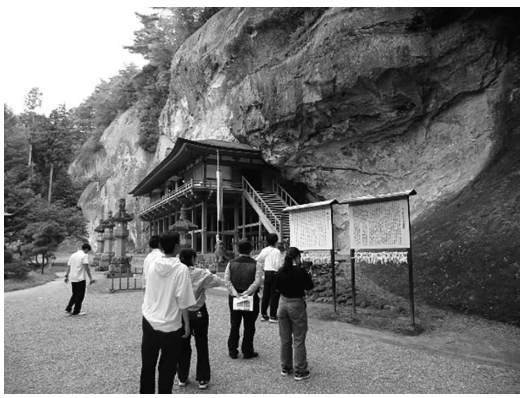
古来幾多の戦闘が繰り広げられた奥州を仏教によって浄め、陸奥辺境の地を仏国土とするという初代清衡の掲げた理想は、中尊寺となった。二代基衡はそれを正しく受け継ぎ、さらに発展させていった。中尊寺をはるかに上回る規模で造営した毛越寺はその所産であったと言える。慈覚大師円仁が開山し、藤原氏二代基衡から三代秀衡の時代に多くの伽藍が造営された。往時には堂塔 40 僧坊 500 を数え、中尊寺をしのぐほどの規模と華麗さであったといわれている。

毛越寺　浄土庭園大泉が池

【西光寺（達谷窟毘沙門堂）】

801 年（延暦 20 年）、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂は、征夷大将軍としてこの地に赴き、激戦の末に蝦夷を打ち破った。戦勝は毘沙門天のおかげと感じた坂上田村麻呂は、そのお礼にこの窟に清水の舞台を模した九間四面の精舎を建て、108 体の毘沙門天をお祀りし、国を鎮める祈願所とした。

達谷窟毘沙門堂の左隣には、岩壁に刻まれた大磨崖仏がある。高さ約 16.5 メートル、肩幅約 9.9 メートルの大きな像で、その名も「岩面大佛」。前九年の役と後三年の役で亡くなった敵味方の霊を供養するために、源義家が馬上より弓張を以って彫りつけたと伝えられている。



達谷窟毘沙門堂

お礼

山田市雄教育長をはじめ陸前高田市教育委員会の皆様、文化財調査にご協力いただいた寺院関係者の皆様、特に研修のすべてにおいてコーディネートいただいた陸前高田市立博物館前館長　松坂泰盛様に心よりお礼申し上げます。

自分事として考える減災教育を目指す
―被災地の見学と被災者の声を聴くことを通して―

大学院教育学研究科専門職学位課程　教職開発専攻　1回生　中本　篤志

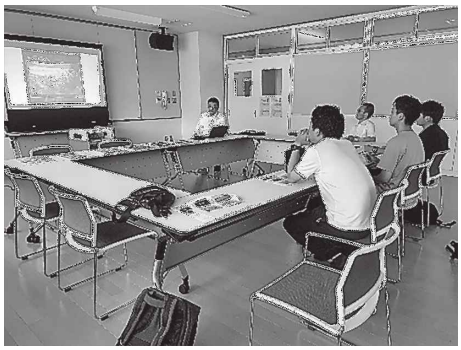
1. はじめに

2024年9月10から13日にかけて陸前高田市文化遺産調査団のESD防災班として参加した。私にとって、東日本大震災が発生した13年前は、教員として初めて採用された1年目であった。連日のメディアによる情報などで被災地の多大なる悲惨な状況を知った。初任校でもその年、始めて担任した子どもたちと、その地震や津波による影響や悲惨さ、当たり前の日々を毎日送れるということの有難さに感謝しながら、防災についての話をした。

しかし、実際に自分の目や耳で感じたことを、目の前の子どもたちに語れていない自分の浅薄さをいつも感じていた。そして、いつか被災地に赴き、実際に自分の目で見て、被災者の声を聴き、感じたことを子どもたちに伝えたいと感じるようになった。南海トラフ地震への切迫性が高まっている昨今、今回の調査プロジェクトで経験したことを生かし、「自分事として考えるための減災教育」を目指して、2つの点から感じたことを述べていきたい。

2.「まさか」という怖さ

陸前高田市立高田小学校の佐藤健校長より、「東日本大震災からの学校再開」のお話を伺った。そのお話の中で、足りなかったものとして「想定外の想定欠如」「正常性バイアス」「同調性バイアス」の3つを挙げておられた。人は、死を前提に物事を考えない。「きっと大丈夫」という心理的特性が働き、自分にとって悪い情報を無視したり、過小評価したりして、いつもと同じ状況で正常だと心の状態を保とうとする。そして、「まさか」と思ったときにはもう状況が深刻化しており、どうしようもできない状況へとなってしまっているのである。私自身も、これだけ南海トラフ地震が騒がれているにも関わらず、防災対策としてはハザードマップの確認や防災バックを準備する程度で、最悪の事態まで想定できていないのが現状であった。まさしく心のどこかで「まさか」と思っているのである。2011年3月11日14時46分に発生した東日本の被災地でも同じような考えの方々がたくさんいたのだと思う。歴史を遡れば、幾度となく地震や津波の影響を何度も受けてきた地域である。しかし、月日が経過していくとともに、その意識も薄れてしまい、「まさか」と自分に言い聞かせながらその都度判断し、行動していたのである。きっと自分も同じような状況だと、津波など関係なく、家族の安否確認に沿岸部だろうが関係なく走ったと思う。「まさか」と思うことの怖さがここにあるように思う。



陸前高田市立高田小学校
佐藤　健校長による講話

3.「いつか」という大切さ

漁業に関わる方々からの聞き取り

岩手県漁業士会会長の佐々木淳さん、大船渡市綾里漁業協同組合総務課長の佐々木伸一さん、大船渡市農林水産部水産課振興係長の佐藤真司さんより、震災当時や震災後における漁業の様子についてお話を伺った。私は、佐々木さんたちの話を聞く前から、きっと漁に出て仕事を再開するには、まずはメンタル面のケアが最優先にされ、仕事再開には多大な時間を要したのだろうと思っていた。しかし、実際は違った。漁師をされている佐々木淳さんのお話を聞き驚いたことは、あれだけ大きな地震があった次の日には、もう港で漁に出るための道具を拾っていたということだった。また、国からの漁業再開への支援も大きかったと語っておられた。

佐々木さんたち大船渡市の漁師は、そのほとんどが代々漁業に関わる仕事をされている。その中で、地震や津波が来ることは「まさか」ではなく、「いつか」来ることであった。それがこの土地では当たり前であり、それを伝える石碑や教育が伝承されてきた。佐々木さんたちも、自身の父親や祖父、曾祖父と遡って津波の怖さや備えを何度も聞かされてきたという。災害は「１００年確率」でやってくると言われている[(1)]が、忘れ去られることなく、また「どうせ来ないだろう」と甘んじられることもなく、きちんと次の世代へと伝承されてきた歴史の重みや大切さを感じた。

4. おわりに

陸前高田市立博物館
地震による津波の怖さを伝える石

4日間を通して、震災遺構の見学や被災者の方々からの聞き取りなど、自分の目と耳で感じることができたことは、本当に大きな収穫であった。陸前高田市の教育長である山田市雄氏が「陸前高田の方で、被害がなかった方は誰もいない。みんな辛い思いや経験をしている」と教えていただいた。そのような辛い経験の中、私たちに語っていただいたことを胸にしっかりと刻んでおきたいと思った。片田敏孝氏は「避難三原則」として、「想定にとらわれるな」「最善をつくせ」「率先避難者たれ」の３つを挙げている[(2)]。奈良の根拠のない安全神話に騙されることなく、「まさか」の想定外に怯えるのではなく、「いつか」来るその時に備えて、真剣に自分事として捉えられるような減災教育を展開していきたいと思う。そのためには、まず、地域のことをよく知ることが大事だと気付かされた。その土地の特徴、過去の災害の歴史や昔からある言い伝え、避難場所、住民の様子、地域の防災組織など、やはり知識として知っておくことは大事である。地域のことを深く理解することが、地域を守ろうとする防災意識に繋がるのだと思う。そして、学校現場でも行われている避難訓練や防災教育を再度見直し、いかに想定にとらわれずに、あらゆる視点から物事を考え、想定外を想定し、それを常に更新しながら教職員間で共有し、継続していくことができるかが求められているのだと思う。

今回の経験を生かし、地震や津波など自然災害に対する正しい知識と、適切な判断を身に付け、主体的に取り組んでいく姿勢を養えるような減災教育を私も展開していきたいと思った。

---

1 片田敏孝（2012）『人が死なない防災』pp.20-21

2 同上,pp.60-77

陸前高田文化遺産調査団で学んだこと

英語教育専修４回生　苗代　昇妥

１　はじめに

私は、陸前高田文化遺産調査団の ESD 防災班として 2024 年９月に４日間で岩手県陸前高田市と大船渡市を訪れた。東日本大震災の被災地を訪れるのは初めての経験だった。陸前高田市内の海に近い地域では、現在も空き地が目立っていた。また、海が見えないほどに高い防潮提の影響で、ここが海に面した街だと感じにくい風景を目の当たりにして、津波の恐ろしさや爪痕を感じられずにはいられなかった。

ここでは、この調査を通して私が学んだことや考えたことを三つの観点に分けて述べていきたい。

２　命を守るための防災・減災教育

一つ目に、防災・減災教育について述べる。陸前高田市では死者・行方不明者を合わせると 1800 人以上の犠牲者数となっており、岩手県内で最多となる被害があった。そのような陸前高田で生死を分けたのは、マニュアルにとらわれず「少しでも安全なところへ」と避難することができたかどうかだと学んだ。陸前高田市では、学校管理下で亡くなった子どもはいなかったそうだ。しかし、午前中で学校を終え、買い物に出かけていた子どもがなくなってしまった。その子どもたちは、店で地震に遭い、避難場所に指定されていた体育館に避難したが、そこに津波が押し寄せ、犠牲となってしまった。学校の先生からのお話では、「正常性バイアス」と「同調性バイアス」が避難の妨げになると学んだ。正常性バイアスとは、異常なことが起きてもたいしたことではないと落ち着こうとする機能で、同調性バイアスとは、危険な状況でも周囲の人の行動に合わせようとする機能である。友達と一緒に体育館に避難していた中学生の子どもは、このようなバイアスの影響があっただろうと先生は仰っていた。マニュアルに関係なく、少しでも安全なところへ避難する意識が命を救うのだと分かった。

また、先生は、「教え子を亡くしてしまうことに、学校管理下かそうでないかは関係ない」と苦しそうに語ってくださった姿に心が痛む思いだった。学校にいるかどうかに関係なく、どんな状況であれ、児童生徒が自分の命を守ることができる防災・減災教育を行わなければならない。

３　とっさの行動を可能にする口承

この調査を通して印象的だったのは、災害への「備える意識」の違いである。この調査では、岩手県大船渡市にも訪れ、大船渡津波伝承会の方のお話や大船渡市内の綾里地区の漁師さんのお話を聞くことができた。この方々のお話に共通していたことは、家族や周りの人と津波の備えについて普段から話していたということだ。伝承会の方は、勤務していた会社に張り紙をして地震が来たらすぐ避難できるように備えていて、それが功を奏して、地震発生後すぐに社員とともに逃げることができたと教えていただいた。また、ご自身も小さいころから家族に「地震が来たら津波が来ると思え」と

教えられていて、地震が来たときにその言葉を思い出したとのことだった。漁師の方も普段から、車に乗りながら子どもに「ここまで津波が来たんだよ」と東日本大震災のことを教えていると仰っていた。

このように、普段から災害について教えたり話したりしているのは、災害の経験が少ない地域と大きく異なる点だと感じ、印象的だった。一方で、被災地と未災地の災害に対する意識の違いをなくしていくことが奈良県のような災害の少ない地域における防災・減災教育の役目の一つだと確信した。

4　陸前高田の復興

三つ目には、陸前高田市の現在の様子について述べる。現在の陸前高田市は、ハード面の復興は既に完了しているとのことだった。実際に、津波で大きな被害を受けた海に近い市街地は再整備され、綺麗な住宅やお店が立ち並ぶ光景を一見すると津波の爪痕は感じられなかった。しかし、陸前高田の方々のお話を聞いたり、震災遺構を訪れたりすると現在も震災の影響が街中に残り続けていることが分かった。

特に印象的だったのは、復興遺構として保存されているベルトコンベアの基礎部分である。陸前高田市では、高さ 10m以上の市街地のかさ上げ、盛土工事が行われた。その工事で使用されたベルトコンベアの基礎が復興遺構として保存されていた。現在残されている部分を見るだけでも大規模な工事が行われたことを想像することができた。同時に、それほどの工事をしなければ、新たに街を再興することができないほどの被害があり、復興までの道のりには大変な困難があったことも理解できたように思う。

ベルトコンベアの基礎

陸前高田市内

写真に写る部分は盛土がされている

5　おわりに

今回の調査では、陸前高田市に関わる方々をはじめ多くの方のご協力のもと様々な体験・経験をさせていただくことができた。改めて感謝申し上げたい。

この調査を通して学んだことを存分に生かして、防災・減災教育を中心とした ESD 実践の提案をすることで、ご協力いただいた皆様に恩返しできるように引き続き努力していきたい。

陸前高田市文化財調査団に参加して

文化遺産教育専修４回生　広野　祥子

１．はじめに

2024 年 9 月 10 日から 13 日にかけて陸前高田市文化遺産調査に参加した。一昨年度にも参加させていただいた文化財調査団の一人という立場で、以前よりもさらに町は復興・発展しているところを見ることができ、今まで以上の親しみを覚えたと同時に、住んでいる方々の声を前回以上に聞くことができたことが改めて貴重な経験となった。

２．被災地を訪れて

２年前に訪れた際には、すでに土地の底上げや堤防が建てられ、新しい街も生まれていたが、今年度はさらに陸前高田市立博物館といった施設も建てられたことで、さらに町は活性化していた。民宿や調査等でお世話になった方々はとても温かく、住民の方々が陸前高田市での穏やかな生活を取り戻しているような感覚もあり、人の力強さを実感した。ただ、教育委員会の方々の話を伺った際に、「震災の話をするのは避ける人が多い」「心の復興はまだ終わらない」といったような言葉を聞き、震災の深い悲しみは未だに残り続けていることを知った。そして同時に、陸前高田市という場所で大切な人が亡くなり、それでもその地にとどまり続ける、そして新しい町として再生していくという人の営みを実感することができた。

地域の方々の暮らしだけではなく、多くの震災遺構をはじめ、「津波伝承館」や「陸前高田市立博物館」は、あえて震災の跡を残すようにすることや、震災当時の様子、震災時に被災した展示品をふたたび保存処理をしたうえで展示するなど、今までにない活用の仕方を実践していたことも印象的であった。さらに陸前高田市立博物館では震災前後で繋がった様々な地域との関係も展示品を通して伝えており、人のつながりが文化の継承に直結し、震災と向き合うことで震災を乗り越えようとする姿勢を町全体で示していることも分かり、2 年前より陸前高田市の向き合うものの大きさと地域をあげた復興を学んだ。

３．文化財調査に参加して

陸前高田市での２度目の文化財調査は、以前の調査結果をもとに再検討する仏像と、新しく調査させていただく仏像といったバリエーションがあり、限られた時間で様々な経験をすることができた。巨像の移動や１日で二つの寺院の仏像調査をするなど、私にとって初めての調査日程となったこの調査では、先生ならびに陸前高田文化財調査団のメンバーと協力しながら行う場面がいくつもあった。

調査させていただくお寺のご厚意で自由に調査させていただく分、文化財を傷つけないことはもちろん、何度もの文化財調査に参加させていただく自分だからこそ、調査メンバーがそれぞれ役割を得られるようにすることに気を配ることは多く、改めて文化財調査のやりがいを感じた。

今回の調査では、複数の寺院でそれぞれの仏像を調査させていただいたため、主に実測と以前の調査報告書を精査し、再検討することが主であり、調査方法自体は多くなかった分熟覧する機会が多かった。そうしてみると、室町時代の作例であるものでも平安時代初期・鎌倉時代の作例に習っている部分があるなどの点は、古典に習う仏像の造形を知るためにとても勉強になった。そのため、これからも仏像にかかわる研究していく際に、必要な見る視点を養う機会となったと私は考える。

4．終わりに

今回の陸前高田市文化財調査団では、2度目に参加させていただくからこそ、4回生だからこそできることを意識して臨んでいた。前回では知ることのできなかった地域の方々の生の声や、昔から地域で守られてきた様々な文化財の現在、広い視野をもって調査をするやりがいなど、多くのことを学び、経験することが出来た。「心の復興」という課題を残しながら、それでも昔から大切にされてきた陸前高田市という場所の温かさや力強さを実感し、文化財をはじめとした文化が継承され続け、発信している陸前高田市という場所に対する深い敬意と感謝を示したい。文化財調査、地域の方々からのお話、それをふまえた教材制作などといった今回の経験を通して、改めて私自身が、地域振興の助けにつながる重要性を学ぶことにつながった。

左）常膳寺千手観音立像調査の様子

右）向堂観音堂十一面観音坐像(浄福寺管理)調査の様子

旧気仙郡伝来の古仏に接して

文化遺産教育専修２回生　山本 隆萬

この度令和 6 年度陸前高田市文化遺産調査プロジェクト研修旅行に文化遺産班メンバーとして参加する機会を得、私にとって初めての東北への旅となった。思い返せば 13 年ほど前になるだろうか、私の父が東日本大震災の発生直後に現地ボランティアとして陸前高田に赴き、震災の爪痕が生々しく残る当時の惨状を見せてくれた記憶というものが、私にとっての東北、そして震災に対するイメージだった。仙台市街から三陸自動車道で陸前高田へ向かうと、そこには平穏で新しい街があった。本文では「新しい街」と文化財、つまり「この街の歴史」の関わりに主軸を置いて考える。

1, 街の復興について

陸前高田市役所では山田市雄教育長並びに松坂泰盛氏への挨拶と両氏による街の復興に関するレクチャーがあった。そこでは生活環境に必要なハード面の完成の一方で、新興造成地へ人々が帰ってこないという課題を抱え、街の風土に注目する移住者の刺激への期待を抱く街の思いを聞き取った。陸前高田市には現在(2024 年 8 月末日) 7,599 世帯、17,347 人の人々が暮らしている。本プロジェクトが発足した 2012 年の 9 月末日では 7,483 世帯、20,772 人の人口であり、人口減少問題は同市を持続する上で重要な課題である。私は市の施設の見学や聞き取りを通じ、街の歴史の持つ“温もり”に感化される移住者の活力こそ、この街が持続していく上で必要なのではないかと考えた。

2, 調査対象の三ヶ寺について

今回文化遺産班では急遽、常膳寺千手観音菩薩立像 (陸前高田市小友町)・向堂観音堂旧蔵十一面観音菩薩坐像 (気仙郡住田町)・長谷寺聖徳太子立像 (大船渡市猪川町)が調査対象となり、本プロジェクトにて山岸先生が過去にも調査を行った寺院にて再調査及び新規調査を行なった。いずれも旧気仙郡に属する寺院で、陸前高田を含む地域の歴史に欠かせない文化財である。また其々のお寺で寛大に調査を受け入れて下さった皆様にありがたく思うと同時に、山岸先生の慇懃な姿勢を間近にして、調査する際の心掛けを学んだ。大変恐縮ではあるが、本文では紙面の都合上以下の２ヶ寺に絞って感想を記した。

2-1 常膳寺千手観音菩薩立像 (陸前高田市小友町) について

本像は常膳寺観音堂秘仏・十一面観音菩薩立像のお前立として安置されており、今回再調査を実施する事となった。制作時期は室町時代に遡ると考えられる。垂髻には毛筋彫りを施し、地髪部に 7 面、髻部に 4 面の計 11 面を現状有している。頂上仏面が無いのは珍しいとは思ったが、十一面観音の仏面配置をスライドして考えるべきでは無いという事を教わった。脇手については相当後補部材が組み込まれ、またその位置も改変されている痕跡がある事からも当初の像容を留めるとは断言できない。しかしながら当初の脇手を観察すると柔和で丁寧な彫刻が施され、また腰以下の衣文表現には相当な技量を持った仏師が手掛けた事が窺える。今回は台座下に介護用のスライディングシートを入れ込み、3〜4 人で像を回転させる事に成功した。重たい本像の下にシートを入れ込む作業や最初の回転には苦労したが、コツを掴んで慣れてくると多少は楽に回転でき、これにより像の斜側面や側面、背面のデータを得ることができたのは今回の大きな成果であった。作業空間の限られる須弥壇上で協力して調査でき、山岸先生も「美しいティームになってきた」と評して頂いたのは、微力ながらも調査に貢献できたような気がして嬉しかった。丸半日の調査の中で御像の支え役や撮影、計測や記録に携わる貴重な体験をさせて頂いた山岸先生の思召に感謝申し上げると共に、調査を引き受けて下さった同寺小林住職の特別な御取計にも感謝申し上げたい。私がこれから仏像に対し文化財調査的立場として関わる上での第一歩として、この日の事は終生忘れ得ぬことだろう。

常膳寺観音堂内の調査の様子

2-2 向堂観音堂旧蔵十一面観音菩薩坐像 (気仙郡住田町)について

本像は以前にも調査対象となっていたが、この度再調査する事となった。常膳寺の観音像とも近い特徴を持つと見られ、平安期の特徴の残る室町時代頃の作と見られる。小ぶりながらも精緻な彫刻にはこの地に優れた腕を持った仏師が居た歴史を物語る。取り外された頭上上段部４面と坐した化仏には天台の影響もあるらしいが、この地に独特の様式が持ち込まれた事が窺える。私は大学にて模造に接した事があるが、実物に接すると刀の入れ方の違いといった細かい部分の差異に気付いた。例えば頭上面には３ヶ所後補と見られる部分があるが、うち一面は山岸先生が「これは後補だと思うんだが、どうか」というお言葉が無ければ気付かなかった程馴染んでいる。しかし凝視すると実に刀の使い方、頭頂部の膨らみが異なるのだ。こういった“気付き”というのはやはり実物を見て、先生の導きがあってこそ得られるんだな、と己の不肖さに唯恥じ入る。

向堂観音を調査する山岸先生

3, まとめ　～ 高田松原津波復興祈念公園の見学を踏まえて ～

本プロジェクトの実施意義の一つは、東日本大震災により甚大なる被害を受けた陸前高田市とその周辺地域に於いて、仏像等の文化遺産を調査することでその価値を明確にし、市民を元気づけることがある。その為仏像調査と同等の姿勢を以て、我々が見聞してきた東日本大震災の惨禍を、現地に訪れる事によってより深く理解しなければならない。現地に着いた我々は民宿にて、震災発生から 13 年半というニュースを見た。陸前高田市には嘗て日々メディアに流れた様な瓦礫や高田松原の枯死した松の根株、また復興に向けて走り回るトラックなどの重機の姿はなく、既にある程度の復旧は終えているように見える。潮風の香りが高さ 13m の防波堤で鼻につかなくなったこの新しい街には空き地が目立ち、人影が少ない。豊かな環境がやけに寂しく感じられたのは住民にも同じであった。喩えるなら魂の籠っていない仏像の様な感は、この街にまだまだ震災の禍根が残っているからなのか、それとも復興に当たって何か要素が欠けたまま来てしまったのか。高田松原津波復興祈念公園を中心に寂寥感に包まれながらこの街の真の意味での復興について考える端緒となった。さて、2 日目の 9 月 11 日に調査を実施した常膳寺は、箱根山麓に在る古刹で、この小友地区にはお寺と見紛う様な古民家が多く、また化石の産地としても有名だ。石段を登り切ると岩手県随一の姥杉が出迎えてくれる。振り返って眼下には広田半島を望む。あちらの広田半島では牡蠣や帆立、“幻の貝”と呼ばれるイシカゲ貝が名産として知られる漁場で、この地に累代の暮らしの標をみた。市街地からは僅かの距離とはいえ、初日に感じた寂しさはなかった。しかし、山岸先生から伺った話によれば、東日本大震災の発生当時、先程我々が通ってきた半島の付け根の平地にて太平洋と広田湾 (註:津波痕跡高 18.3 m)の両岸から津波が襲い、それが真っ向衝突したのだという。これにより、主要幹線道路である大船渡広田陸前高田線が寸断し、インフラ・ライフラインも断絶したために復旧までの 3 日間“孤島”と化した。現在はその付け根にも田畑が広がり、その様子は夢想だに出来ないが、環境をいとも容易く変える自然の脅威の凄まじさを感じた。同時に塩害など農耕に不向きな環境から土壌を復興させる人間の力の凄まじさというのも感じた。これは山田教育長並びに松坂氏に質問した事なのだが、「なぜ此処に住み続けるのか」という私の愚問は、自然を受け容れ、家族や仲間らと手を携えて乗り越えた一種の運命共同体としてこの地を選び、生きていくということなのだと理解した。だとすれば、この街にはもっと活気があっていいはずなのである。そこで「歴史」や「文化財」のもつ“大きな時間軸”というものはやはり活力となり得るのではないだろうか。歴史×文化財×民間活力のシステムを構築すれば、旧気仙郡に伝来する美麗な仏達は長く地域の誇りとして実感し、より“愛される”存在となってまたこの街に引き継がれてゆくだろう。愛されればそれは地域を超えて人々に呼応して活力となると考えている。その為には接見した我々が PR する責務がある。調査を実施した仏像達がより愛される様な提案ができる様、今後とも引き続き精励し、微力ながらも貢献していきたいと思う。

令和 6 年度 文化遺産調査に参加して

社会科教育専修 2 回生 金川　恵人

1．はじめに

私は 2024 年 9 月 10 日から 13 日の 4 日間にわたり、陸前高田市文化遺産調査団の文化遺産班として、仏像調査や文化遺産・震災遺構・復興遺構見学に参加した。奈良市で生まれ育ち、畿内以外の仏像や建築物に触れる機会が少なかったことや、大きな災害に遭わずに育ってきたことから、自身の歴史観や災害観に変革をもたらし、また自然環境の変化や災害を自分事としてとらえることができたことは大きな収穫であった。陸前高田市教育委員会の方々、現地で調査に協力してくださったお寺の方々、各博物館施設の方々、大学の先生方の多大なサポートの元でさせていただいた経験について以下で述べていく。

2．文化遺産調査に関して

常膳寺の千手観音菩薩立像、向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像、長谷寺の仏像一点の調査を行った。また、東川院や平泉文化遺産センター、中尊寺、毛越寺などの見学も行った。

図 1　調査対象となった長谷寺の仏像

このうち長谷寺の仏像の調査は特に、初めて仏像にしっかりと触れる機会となり印象深い。木の質感やざらつき、虫食いや彩色跡の様子は今後忘れることがないだろう。当仏像は両側頭部に部品を取り付けていた跡があり、その形状や位置から角髪とも考えられることや、欠損しているものの両手を差し出した形であることから、角髪を結い柄香炉を持つ十六歳頃の聖徳太子を表した「孝養図」や「孝養太子像」と呼ばれる姿との類似性が認められ、元は聖徳太子像である可能性が指摘された。衣服などにこの像特有の特徴が見られたのみならず、都との共通点を感じられる部分もあり、大変興味深いものであった。

また、常膳寺の千手観音菩薩立像は腕をはじめ落ちた部位が多くあり、年代がばらばらであろう後補の手が多くついていた。珍しく当初の光背が劣化し外された後も大切に保存されており、その彩色の様子や彫刻の精緻さもよく見させていただいた。常膳寺千手観音菩薩立像が修理を繰り返されながら長い間信仰を集めていたことがうかがえた。調査のためにシートで回転させて写真を撮ったり、各部位の長さや特徴をまとめたりすることで、過去の研究を鑑み今後の研究に繋げていくことは、文化財を知る他にも文化財保護のための情報となるなど大変意義のあるものだと感じた。

3．防災について

東北では東日本大震災以前にも大きな津波を幾度も経験しており、1960 年のチリ地震津波や 1983 年の日本海中部地震など、大人の中には過去の災害のことを記憶している世代が多くいる。一方で、東日本大震災からすでに十三年もの月日が経っているのも事実であり、中学生でも当時のことを覚えている人が少なくなっている。

今回の調査では、自身も東日本大震災発災時に被災したという陸前高田市の教育委員会の松坂氏、山田氏からも話を聞くことができた。山を削りだした土を運ぶベルトコンベアを作り、古い町を十メートルかさ上げすることで新たな住宅地を作ったという話や、山を削ったところに人口が移動してかさ上げをした土地にあまり人口が戻らなかったという話から、人も含めて元通りになるということが想像以上

に難しいのだと知った。

また、陸前高田は東北の中では温暖な方であり、雪も少なく夏場は比較的涼しい土地であることや、自然豊かで食べ物が豊富なこと、古くから人が住み縄文時代以降の歴史的遺産が豊富にあることも現地で初めて理解した。実際に、今回は暑い時期に行ったものの奈良ほどの蒸し暑さは感じなかった。このように魅力的な土地である一方で働く場所が減ったことや交通の便が悪いことが枷になっているといい、改めて被災による影響の大きさや恐ろしさを目のあたりにした。伝承館では曲がってしまった鉄橋の一部や被災者の声など、人的被害の凄惨さを感じたが、被災の文化的影響は、陸前高田市博物館での被災した収蔵品の展示でも感じることができた。海水に浸かってしまった収蔵品の中には明治以降の手記や革製品など修復が難しいもの、塩分などを含んだことで劣化やカビが発生しやすく保管が困難なものも多い。津波に呑まれた収蔵品を元に戻そうとすること自体が世界初の試みであり、修復が必要な収蔵品がそもそも多い上に、修復が現時点では不可能なものも多くあるということにやるせなさを感じた。そのほか陸前高田市博物館では震災が繋いだ縁や、東日本大震災から世界中に学びが広がっていることも実感した。

また、教育委員会の方々から紹介をいただき、「アーバンデータチャレンジ」というデータ活用による地域課題解決についての話も伺い、個人でも触れてみて防災学習以外にも様々なことに生かせそうだと感じた。

４．最後に

今回の研修では初めて仏像の調査に参加し、文化財の調査方法や、調査結果からの考察を一部であるが実地で知ることができたのは貴重な経験であった。文化遺産調査や宮城・岩手各地の博物館展示では、地域によって異なる歴史や表現があり、中央政権から攻め込まれた東北という土地独特の歴史観がある一方で、中央との交流も感じた。教育やそれにかかわる施設では同じ国であっても物事の見方は無意識にも異なっていると知らせることも、それを比較したり伝えたりということもでき、分断や社会問題に対するアプローチとしても大きな可能性を感じた。

また、防災班とともに学習した東日本大震災や過去の震災、陸前高田を中心とした風俗や気候、繰り返し受けてきた地震や津波の被害からの教訓は忘れないようにしなければならないと感じた。東日本大震災当時の被災状況だけでなく復興についても学ぶことができたし、復興の際使われたベルトコンベアの跡などの復興遺産という存在についても初めて知った。復興は完全に終わったわけではなく、今だに爪痕を起こしている。大きな災害、特に大きな津波は西日本の多くの地域にとって身近でない。とっさに命や大切なものを守る行動がとれるか、災害が終わった後にどうすればいいか、議論し続けなければならない。それは被災した文化財についても同様で、どう直していくかやいかに保存するか、伝えるかという観点は、災害のますます増えてきた日本にとって重要な課題であると考えた。

図 2　被災したユースホステルと「奇跡の一本松」

陸前高田市調査団に参加して

心理学専修 1 回生　谷山　陽輝

1．はじめに

私は令和 6 年度陸前高田市調査団に参加させて頂いた。私が陸前高田市調査団に参加したいと思ったきっかけは、以前から防災に関しての学習をしたいと感じていたからだ。私は小さい頃から教員になることを目指している。教員という職業において、必ず向き合わなければいけないものに防災教育がある。防災教育とただ単純に言っても、種類は多岐にわたる。道徳などの授業などにおいて過去の災害から学ぶ防災教育、実際の災害を想定して行動する避難訓練なども防災教育に該当すると考える。しかし、私は生まれも育ちも奈良県であり、大きな災害を経験したことがなく、防災教育を実践するにあたり経験不足を感じる。そうした思いもあり、今回の陸前高田調査団において、実際の被災地を学習教材として防災教育や復興について学ぶことを目的として参加した。

2．陸前高田市について

陸前高田調査団を通して感じたのは、陸前高田市周辺を含む地域の人々の、「自然と共に生きる」という姿勢だ。今回訪問させて頂いた陸前高田市は、東日本大震災により、甚大なる津波被害を受けた町である。津波は町を一瞬で荒廃した土地に変え、数多くの人命を奪った。津波が起こった後も、多くの人々が、自分達が住んでいた家や職場が流され生活する場所を失くしたり、家は無事でも電気や水道などのインフラが使えない生活を強いられたりした。その様な悲惨な状況から 13 年が経った陸前高田は、驚くほどの復興を見せていた。

町は綺麗に区画され、目新しい建物や博物館などの公共施設が立ち並ぶ（図 1,2 を参照）。一見すると、どこかのニュータウンかといったような印象を受ける。また、町には数多くの新築の住宅が点在する。そこに住む人々は、津波が起こった後も陸前高田に残った人、津波が起こった後に陸前高田に引っ越してきた人たちである。津波が起こったような危険な地域に、どうしてまた家を建てたり、引っ越してきたりするのかを、陸前高田調査団として最初に訪問させて頂いた市役所でその理由を聞くことができた。

お話して頂いたのは、市の教育委員会の山田教育長だ。教育長も小さい頃から陸前高田市に住んでおり、東日本大震災の津波で家が流されたり、親戚を亡くしたりなどの被害を受けている。そんな教育長によると、陸前高田という土地は、海からの海産資源が充実しており、気候が涼しく、一年を通して過ごしやすい環境であるとお話されていた。そうした土地に人々は誇りを持っており、津波の後でも暮らしている。ただ、津波の後で変わったことは津波の危険を意識しながら生活するということだとお話しされていた。確かに、初日の市役所訪問以降、多くの陸前高田の施設などを訪問させていただいたが、随所で防災への意識を感じた。

3．防災への意識

私たちは、地元の小学校の防災教育への取り組みをお聞きするため、地元の小学校に訪れた。今の小学生は、実際には津波を経験していない。しかし、陸前高田で起こった出来事は時を越えても受け継がれ、児童にも引き継がれている。例えば、高田小学校の 4 年生では津波避難マスターと題して、避難経

路を教員だけでなく、児童も一緒に確認するという取り組みを行っている。その他にも、各学年とも津波だけでなく、いろいろな防災についての取り組みを実施していた。

また、町を歩いていると、数多くの高台情報の看板が掲載されている。その他に、飲食店などにも津波や地震に関する標語などが設置されており、地域全体での防災意識の高さがうかがえた。

４．復興への課題

前文において、陸前高田の町は、建築面ではほぼ復興が進んでおり、以前よりも高い堤防なども作られ復興を果たしていると述べた。しかし、津波の被害にあった人の心の傷は癒えていない。未だに津波のショックから立ち直れていない人も多くいる。その様な人たちのケアをどうしていくのかが、これまでも、これからも課題である。

山田教育長も建物などはほぼ復興しているが、精神面などはまだまだ復興していないとお話しされていた。また、教育面においても今の陸前高田に住む小学生は震災を経験していない。その児童たちに、どのように震災のことを伝えていくのかも課題となっている。また、陸前高田の小学校に勤める先生は全員が震災を経験しているわけではない。その様な先生にとって、震災を教えることは負担と感じる先生も多くいる。逆に震災を経験してきた先生は、話したがらないということもあり、震災教育の有りかたにも課題を残している。

５．終わりに

陸前高田調査団において学んだことを、これからの防災教育に生かしていきたい。これからは南海トラフ地震や大雨災害など、数多くの災害や天災が想定されることより、今一層の防災教育は重要視されてくると考える。多くの学生が教員を目指す奈良教育大学の学生は、実際に地震が起こった時に適切な対応ができるであろうか。防災教育を任せられたとき、良い授業ができるであろうか。今一度、自分の防災や減災に関する知識や技能について考えていく必要があると考える。

図１　現在の陸前高田市

図２　震災直後の陸前高田市

陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発（12）

－　防災・減災教育の小中学校の接続について　－

中本篤志
（奈良教育大学専門職学位課程　教職開発専攻）
苗代昇妥
（奈良教育大学　英語教育専修）
谷山陽輝
（奈良教育大学　心理学専修）
大西浩明
（奈良教育大学 ESD・SDGs センター）

The 12th Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development through Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

－　About connecting elementary and junior high schools for disaster prevention and mitigation education　－

Atsushi NAKAMOTO
(Professional Degree Program,Professional Development in Education,Nara University of Education)
Shota NAWASHIRO
(English Education Specialization, Nara University of Education)
Haruki TANIYAMA
(Psychology Specialization, Nara University of Education)
Hiroaki ONISHI
(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

要旨：陸前高田市文化遺産調査において、ESD 防災班は、見学や聞き取り調査などを経て、何度も津波災害を経験している陸前高田の人でさえ、いざというときに正しい行動がとれないことや、それは過去の災害の教訓がきちんと伝承されていないからということに着目した。本稿では、これまでの先行研究をもとに、奈良県の児童・生徒を対象とし、「つながる・そなえる・はたらきかける」をテーマとして地域と協働して防災・減災を学ぶ、小中学校 9 年間を見通した「スタディロードマップ」を提案する。

キーワード：ESD（持続可能な開発のための教育）　Education for Sustainable Development
防災・減災教育　Disaster Risk Reduction Education
伝承する　To pass on

1．はじめに

奈良教育大学では、2012 年度より毎年陸前高田市文化遺産調査団を結成し、岩手県陸前高田市周辺の文化遺産調査などに取り組んできた。コロナ禍により、2020 年度、2021 年度は中止を余儀なくされたが、2022 年度より再開し、2024 年度は本学教員 2 名、教職大学院生 1 名、学部生 5 名からなる調査チームで、9 月 10 日～13 日にかけて、文化遺産調査班と ESD 防災班の 2 班に分かれて活動を行った。本稿は、そのうち ESD 防災班 4 名による研究報告である。

一昨年度の研究報告において、井阪ら（2023）は奈良県における中学校 2 年生を対象とした、自分事化できる防災・減災教育の方向性について、総合的な学習の時間や各教科をつないで連続的な学びを展開することで、「守られる側から、守り行動できる側になる」カリキュラムを提案した。これを受け、昨年度大竹ら（2024）は、そこにつながる小学校 6 年生段階で、各教科の学習をつないでどのような連続した学びが必要かを提案した。小中連携が叫ばれる中、これらの学びをスムーズに接続させることが大事ではないかという思いのもと、小学校段階で身につけておくべき資質・能力や、それを受けて中学校でどのような学びを進めていくことがより効果的であるかについて、現地における調査活動をもとに研究・開発した教育課程として報告するものである。

表１　４日間の主な日程

10 日(火)	・仙台市博物館見学 ・仙台城本丸跡見学 ・陸前高田市教育委員会表敬訪問
11 日(水)	・文化遺産班に帯同 （常膳寺十一面観音立像調査に協力） ・講話「東日本大震災からの学校再開」 陸前高田市立高田小学校　佐藤健氏 ・東日本大震災津波伝承館見学 ・震災遺構見学 （タピック 45、旧ユースホステルなど）
12 日(木)	・大船渡津波伝承会での講話・聞き取り 伝承会代表　斎藤賢治氏 ・大船渡綾里漁業協同組合での聞き取り 岩手県漁業士会会長　佐々木淳氏 綾里漁業協同組合　　佐々木伸一氏 大船渡市水産課　　佐藤直司氏 ・陸前高田市立博物館見学
13 日(金)	・東川院見学 ・平泉世界遺産ガイダンスセンター見学 ・平泉文化遺産センター見学 ・中尊寺見学 ・毛越寺見学 ・西光寺（達谷窟毘沙門堂）見学

２.「伝える」ことの大切さ

東日本大震災から 13 年が経ち、被災地はどこも整備され、一見何事もなかったかのように感じる。また、小学校に在学する児童はすべて震災を知らない世代である。今回、講話や聞き取り、見学の中で、震災の教訓を後の世代に確実に「伝える」ことが、防災・減災教育においていかに大事かを改めて感じた。

２．１　「陸前高田でさえ伝えられていない」

陸前高田市立高田小学校長の佐藤健氏は、震災当時、陸前高田市立小友中学校に勤務されており、当時の様子についてお話をうかがった。

翌日に卒業式を控え、式の準備をされていたそのときに地震が起こった。全生徒 60 名のうち、8 名が死亡。1 年生 6 名、2 年生 2 名、いずれも翌日卒業生に渡すプレゼントや、バレンタインデーのお返しを買うため市街地へ出向いていて津波の犠牲になったそうである。みんな指定避難場所の市民体育館へ避難したもののそこで被害に遭った。

佐藤氏自身が、震災の教訓として 5 点挙げられている。

・経験の逆作用（2 日前の地震で津波警報が出たが 50 ㎝程度だった）

・想定外の想定の欠如（市民体育館は避難所に指定されておりハザードマップの想定外だった）

・正常性バイアス（目の前で大津波を見ているのに我が家は大丈夫と考えていた）

・同調性バイアス（亡くなった 8 名はだれも高台へとは言わなかった。みんなで逃げれば怖くない）

・教員たるもの、防災に関する知見を磨け（防災士、危機管理エキスパートなど様々な資格を取得）

さらに、陸前高田市の防災教育の課題として、小学生は全員震災後に生まれた子であり、被災意識がない一方、保護者はその多くが被災者であり、その中でいかに伝承していくか、校長によってその思いも異なり、市として方向性が出ていないことを挙げられていた。

２．２　「あなたに助かってほしいから」

大船渡津波伝承会代表の斎藤賢治氏は、震災当時は製菓会社の専務であり、会社でも日常的に「地震だ！津波だ！さあ逃げろ！」の注意喚起を行っていた。なぜなら、いざというときにも正常性バイアスがかかり、多くの人が逃げないで亡くなってきたからだという。そして、東日本大震災においても同じことが繰り返されてしまった。

我々にも、「助かってほしいから」、地震や津波に対する正しい知識をもち、普段からの危機管理と、それに応じる当たり前の行動や訓練を積み重ねていくことの重要性を熱く語っていただいた。

２．３　「いつかは来るもの」

大船渡市綾里地区は、明治三陸津波で国内最高の 38.2 mの津波に襲われ、1000 人を超える犠牲者を出し、昭和三陸津波でも犠牲者は出たが、これまでの教訓を生かし、それ以後住民のほとんどが高台に移転した。そのため、東日本大震災では 25mの津波に襲われたが人的被害がゼロだった。

今回の聞き取りの中で、我々の「震災のときどんな気持ちでしたか？」という素朴な質問に対して、綾里漁業協同組合の佐藤氏が「いずれいつかは来るものだと思っていたから。」と言われた言葉にハッとした。綾里では、大きな地震や津波は「いつかは来るもの」として代々伝えられており、それが漁師としてこの地域に生きる者としての「当たり前の意識」となっていることが感じられた。

２．４　「宿命とともに生きる」

陸前高田市立博物館には、「宿命とともに生きる」というコーナーがあり、明治三陸津波からは、「弱くても長い揺れでは津波が来ることがある」、昭和三陸津波では、「強い揺れで津波が来る」、チリ地震津波から、「揺れを感じなくても津波が来ることがある」といった教訓を得てきたことが分かりやすく掲示されている。コーナーのタイトルの通り、地震や津波がたびたび起こることはこの地域の「宿命」であり、だからこそ多くの教訓を後の世代にきちんと伝えていくことが大切なのである。

３．スタディロードマップ

ESD 防災班として行った震災遺構の見学や聞き取り調査を通して、小中学校の９年間を見通した、地域・家庭・学校が一体となって連携し、協働することができるような防災・減災教育の重要性を感じた。また、防災・減災に関わる知識が、伝承され、教訓となり、世代を超えてその地域に根付いていくためには、防災・減災に関わるものだけに焦点を当てるのではなく、これまでの地域や家庭とのつながりある活動の重要性についても同様に感じた。それは、あれだけ大きな地震と津波を経験した陸前高田市でさえ、それを知らない世代へと引き継いでいくことに課題意識をもたれていたからである。これまでの経験からくる教訓を残し、それを次の世代へとつないでいくことを大事にされていた。しかし、奈良においては比較的これまで大きな災害を経験したことがない、いわゆる未災地である。このような地域では、これまでの経験や教訓が風化し、なかなか次の世代へと引き継いでいくことが難しいように思う。このようなことを踏まえて、今回奈良で行う防災・減災教育の方針として、以下図１に示す小中学校の９年間の学びを通した防災・減災教育を充実させるとともに、地域から学ぶ、地域とつながることを重要に考え、その概要を以下に述べる。

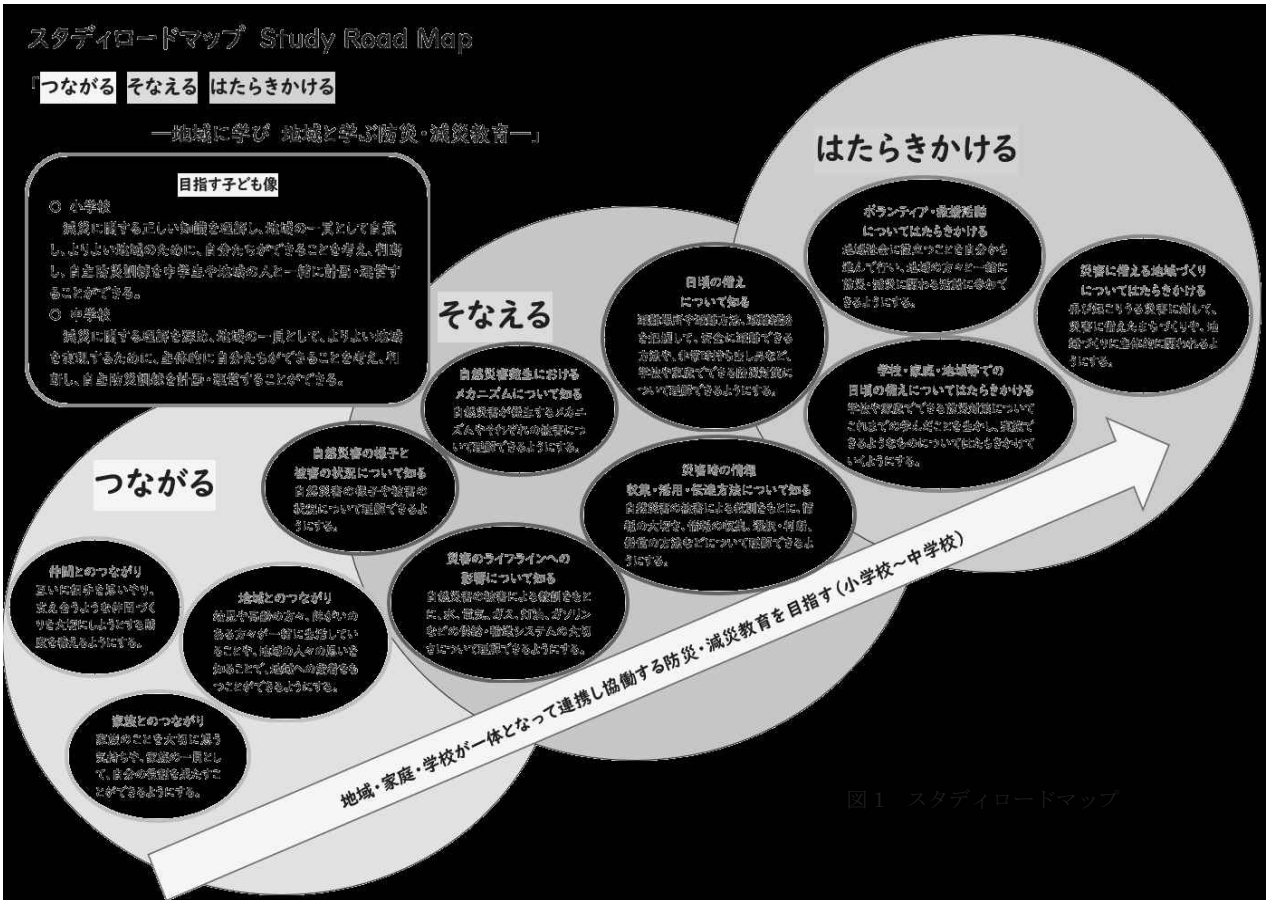


図１　スタディロードマップ

３．１　スタディロードマップの概要

スタディロードマップ（図１）の表題を「つながる　そなえる　はたらきかける　―地域に学び　地域と学ぶ防災・減災教育―」と題した。これは、小学校段階から中学校段階の９年間にかけて防災・減災教育を学んでいく過程である。

「つながる」は、自然とのつながりや、地域・家庭とのつながりを通して、子どもたちが身の回りの人やものとのつながりを感じられるような教育活動の充実を図る場面である。「そなえる」は、自然災害や防災・減災に関する知識を学ぶことを通して、日頃からできる非常時の対策や備え、災害を想定した行動について考えることができるような教育活動の充実を図る場面である。「はたらきかける」は、子どもたちが地域の一員として、これまで学んできたことができるような教育活動の充実を図る場面である。小学校と中学校における目指す子ども像と、それぞれの段階における概要については以下に述べる。

小学校段階における目指す子ども像を「防災・減災に関する正しい知識を理解し、地域の一員として自覚し、よりよい地域のために、自分たちができることを考え、判断し、自主防災訓練を中学生や地域の人と一緒に計画・運営することができる」とした。そして、中学校段階における目指す子ども像を「防災・減災に関する理解を深め、地域の一員として、よりよい地域を実現するために、主体的に自分たちができることを考え、判断し、自主防災訓練を計画・運営することができる」とした。

まず、小学校低学年段階では、特に地域と「つながる」ことを重要視した。それは、大船渡綾里漁業組合の方々からの聞き取りによって気付かされた、教訓による大切さからである。副題にある「地域に学び」という部分がまさにこれである。地域の人と子どもたちが交流し、関わる場面を充実させることによって、その地域の歴史、文化、伝統に触れながら、自分たちの地域のことを学んでいくことができる。そして、それは同時に自分たちの地域に住まわれている人々とのつながる場づくりにもなる。

そして、小学校高学年段階から中学校段階にかけては、防災・減災に関する正しい知識の習得と理解を深めるとともに、「そなえる」ことを重要視した。これは、正しい防災教育による知識や備えが自分たちの命を守ることに繋がるということを痛感したからである。

最後に、主に中学校段階では、子どもたちが地域の人と一緒になって、自主防災訓練を計画・運営することを目指す。副題にもある「地域と学ぶ」という部分でもあるが、子どもたち一人一人が地域の一員としての自覚をもち、自分事として主体的に地域の人に「はたらきかける」ような活動を充実させていく。ここでは、これまでの地域とのつながりは勿論、災害に対する正しい知識と、防災・減災の備えについての知識を活用し、小学校段階から身に付けてきた学びを総合して生かすことができる。

ただし、この「つながる　そなえる　はたらきかける」を軸に置いた学習課程は、それぞれが独立して行われていく活動ではない。小中学校の９年間の学びを通して、子どもたちが学んできたことを地域の人と協働しながら、自分事として主体的に行動し、自分の命は勿論、地域や周りの人の命をも守ることができる人材になっていくことを目指した一体的な学びの過程である。

３．２　自主防災訓練に向けた学習課程

スタディロードマップでの総合的な学習の時間を柱とする小中学校における９年間の学び（図２）の集大成として、児童・生徒が地域の人と協働しながら、主体的に活動できる「自主防災訓練」の実施を位置付ける。これは、地域にある防災訓練に参加することに留まらず、防災訓練を児童・生徒が主体的に、地域の人と協働して企画し、準備、運営をしていくものである。

そのために、まず小学校段階では、防災・減災に関する正しい知識を身に付けたり、地域の一員としての自覚を育んだりするための活動を充実させていきたい。特に、図２の星印(★)の単元においては、地理的環境の特色や、自然災害に関する知識、防災・減災に関連する内容を捉えていくことをねらいとしている。

小学校低学年における生活科の時間には、地域の方と一緒に野菜や花づくりをしたり、昔遊びを教えてもらったりして、地域の人と一緒に交流しながら教育活動の充実を図っていく。これは、地域の人にとっても、子どもたちとの関わりは、地元の子どもたちに対する理解を深めることにも繋がる。３年生では、社会科で学習したことをもとに、地域の祭りや行事について調べたことを新聞にまとめたり、地域の行事に参加したりして、地域について知り、学ぶ活動の充実を図りたい。４年生では、自然災害から学んだことを活用して、防災に関する啓発ポスターを作成し、公共施設に掲示してもらったり、家の人に防災リーフレットを作成したりして、地域や家の人に学んだ防災・減災に関する知識を広める活動を充実させたい。５年生では、市役所職員による出前授業などを活用し、避難所開設訓練やテントの設営方法、避難物資配付の手伝いなどを学習したりする。また、この活動では、中学校とも連携しながら、２学年の生徒に避難所開設訓練に参加してもらい、小中の連携を図り、協力しながら学習する場を設定する。さらに、６年生では、家庭科の学習を生かし、避難時における食のレシピ考案やそのレシピ集の作成をしたり、これまで学んできた成果を発表できるような学習発表会を計画したりする。この学習では、自主防災訓練実施に合わせて、災害時に小学生ができることを地域の人にパネルディスカッションなどでアピールしたりする場を設定する。これは、小学校段階における自分たちの学びのまとめを地域の人と共有する重要な時間である。

これらの小学校での学びを受け、中学校段階では、防災・減災に関する知識をさらに深めていくとともに、地域の一員として主体的に自分たちができることを考え、判断し、行動できることを目指す。小学校段階と同様に、特に、図２の星印(★)の単元においては、中学校段階でも、自然災害に関する理解を深めたり、防災・減災に関連する内容を多面的・多角的に考察したりしながら捉えていくことをねらいとしている。

１年生では、地域の人や市役所職員の方と一緒になって、地域にある防災資源や危険な箇所等を確認しながら現地を調べ「防災マップ」を作成する。２年生では、体験的な活動を重視し、地域の人と一緒に防災ワークショップに参加する。そこでは、炊き出し訓練や心肺蘇生法訓練、避難所設営訓練などを地域の人と一緒に取り組み、より実践的に自主防災訓練に向けた活動を進めていく。そして、３年生では、自主防災訓練実施に向けて計画を進めていく。具体的には、地域の訓練を運営する団体や市役所職員の方々と一緒に、話合いの場に参加して、訓練実施の目的やスケジュール、訓練内容について一緒に計画段階から入り、立案していく。この活動で重要視したいことは、児童・生徒が、自分たちができることを主体的に考え、地域の人たちと協働しながら進めていくことである。ただし、小中学生だけでは、できないことも勿論ある。そこを地域の方々と一緒に話し合う中で、見られる成果や課題を大事にしながら進めていきたい。小学生に関しては、これまでの学習から、避難場所への迅速な避難や、避難所開設に向けてテントの設営や物資の運搬を中学生と協力しながら行っていく。また、自分たちより小さい子どもを見てあげたり、お年寄りに優しく声をかけたりするなど、地域の人に積極的

図２　「つながる　そなえる　はたらきかける」と小中学校９年間の単元

に関わる姿勢を大事にしていきたい。

中学生に関しては、地域の人との計画段階の中で自分たちができることを見出し、主体的に活動していくことを大事にしていきたい。具体的には、避難に向けて、介助が必要な人に対して手を差し伸べたり、避難場所までの誘導を率先したり、地域の方と共に安全に避難できるように動いていく。また、避難所設営では、小学生に指示を出しながら一緒にその準備を行ったり、救護が必要な人に対して適切なサポートを行ったり、炊き出し準備のお手伝いを行ったりする。さらに、避難所を長期的な目で運営していくためには、衛生管理面から清掃活動を実施したり、避難してきた人の把握や、場所の確保、災害状況や安否確認などの情報の共有をしたりするなど、他にも必要になってくることが見えてくるはずである。

この自主防災訓練では、計画したことが上手く運営できたかどうかを見ていく必要はあるが、小中学生の子どもたちが、地域の人と協働しながら、自分たちではできないことや、自分たちでもできること、そして、自分たちにしかできないことに気付き、それを地域の人と共有しながら実施していくことが大切である。実際の訓練では、課題面も当然たくさん見られると想定できる。しかし、課題を地域の人と共有しながら、この訓練を繰り返し実施し、子どもたちも自分事として、防災・減災の意識や、自分たちも地域の一員として何ができるのかについて真剣に考え、判断し、行動していく姿勢を大事にしていきたい。

4．おわりに

本稿で提案したスタディロードマップについては、今後連携する教科等の具体的な計画を作成、実践し、その検証を図りたい。

参考文献

井阪愛子・川田大登・木幡美幸・大西浩明(2023)「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(10) ―中学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性―」奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究紀要第1号 p.75-78

大竹玲央・村島大賀・櫻木友渚・藤本尋巳・田中愛花・大西浩明(2024)「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(11) -小学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性-」奈良教育大学ESD・SDGsセンター研究紀要第2号 p.93-97

片田敏孝(2012)「人が死なない防災」集英社新書

岩手県教育委員会(2020)「いわて復興教育副読本『いきるかかわる　そなえる』」（改訂版）

高畑地区合同自主防災訓練 開催要項（案）

１. 概要

日時　　令和 7 年 11 月 8 日（土）　9 時 30 分 開始　15 時 終了（予定）

場所　　高畑中学校グラウンド及び体育館など

対象　　高畑中学校区住民

２. 主催

高畑地区合同自主防災訓練実行委員会

３. 後援

奈良市

４. 目的

・近い将来発生するといわれている南海トラフ巨大地震や奈良盆地東縁断層帯地震に起因する活断層地震を想定し、自助・共助・公助の体制を検証するために訓練を実施する。

・震災時、風水害時ともに必要不可欠な避難所の解説手順や運営方法を確認する。

〈奈良盆地東縁断層帯（京都盆地―奈良盆地断層帯と奈良市の位置関係〉

（「京都盆地－奈良盆地断層帯南部（奈良盆地東縁断層帯）の評価」より）

〇将来の地震発生の可能性

地震の規模：M7. 4 程度

地震発生確率：30 年以内に、ほぼ 0%～5%

50 年以内に、ほぼ 0%～7%

100 年以内に、ほぼ 0%～10%

５. 避難想定

令和 7 年 11 月 8 日（土）午前 9 時 40 分、奈良盆地東縁断層によるマグニチュード 7. 5、震度 7 の地震が発生。地震や液状化により家屋が多数倒壊し、火災も多発、水道・電気をはじめとするライフラインにも障害が発生している。学校への避難及び避難所の開設を行い、災害に対応する。

６. 訓練全体のタイムテーブル

時間	内容	場所
9：30	**地震発生を想定して訓練開始**	各自の自宅
10：00 11：30	**学校に避難・避難所設営** 小学生：設営・運営補助 中学生：中心となって設営・運営 地域住民：各自の担当作業実施	中学校
11：30 13：00	**昼食**（炊き出し）	体育館 グラウンド
13：00	**ワークショップ**	場所は以下に記載
	① 防災マップ発表	会議室
	② 心肺蘇生ワークショップ	体育館
14：30	③ テーマ別発表	多目的ホール
14：30	**自主防災訓練振り返り**	体育館

７. 協力団体

高畑地区自治連合会（各自治会）
高畑地区消防団
高畑地区女性防災クラブ
高畑中学校・ＰＴＡ
高畑小学校・ＰＴＡ
高畑幼稚園・ＰＴＡ
高畑保育園
高畑公民館
高畑地区婦人会
高畑地区民生児童委員協議会
高畑地区少年指導協議会
安全推進員高畑支部
高畑地区万年青年クラブ
日本赤十字社奈良県支部
高畑地区包括支援センター
その他（企業、社会教育施設、ＮＰＯなど）

自主防災訓練の詳細なタイムテーブル

時間	訓練の内容	中学生	小学 5.6 年	自治会	一般参加者
9：30	（地震発生）①安否確認・避難				
	(1) シェイクアウト実施	○各家庭でシェイクアウト実施	○各家庭でシェイクアウト実施	○各家庭でシェイクアウト実施	○各家庭でシェイクアウト実施
	(2) 安否表示	○タオルで安否表示	○タオルで安否表示	○タオルで安否表示	○タオルで安否表示
	(3)避難	移動	移動	移動	移動
10：00	②避難所点検・準備				
	(1)防災倉庫確認	○点検時チェックリスト取り出し		○点検時チェックリスト取り出し	
	(2)施設点検	○防災倉庫から備蓄品運搬	○防災倉庫から備蓄品運搬	○目視による施設内外部の確認	
	(3)開設準備	○受付設営 ○受付方法や誘導方法を確認	○貼り紙やテント組立 ○備蓄品展示		
10：30	③ 避難所運営				
	(1)避難者受入	○受付で避難者の名簿作成 ○避難者のスペースへの誘導	○避難者のスペースへの誘導補助	○受付で避難者の名簿作成	○避難者として受付、避難スペースへ移動
	(2)炊き出し訓練	○(2 年) 婦人会と協働で炊き出し ○配布時の避難者整理	○炊き出し補助 ○配布時の避難者整理補助	○婦人会中心に炊き出し訓練	
11：30	④ 食事（炊き出し）				
13：00	⑤ ワークショップ（全体司会：中学校 3 年生）				
	(1)防災マップ発表 （中学校 1 年生）	○(1 年) 自分たちで作成した防	○ (5 年) 防災マップの見学及び	○防災マップの見学及び説明の聴	○防災マップの見学及び説明の聴

		災マップを展示し、解説・質疑応答	説明の聴講や質疑応答	講や質疑応答	講や質疑応答
	(2)心肺蘇生法ワークショップ（中学校2年）	○（2年）消防団主催の心肺蘇生法の学習会の補助	○（5年）ワークショップに参加し、心肺蘇生法を学ぶ	○(消防団)ワークショップ体験者の心肺蘇生法の指導	○ワークショップに参加し心肺蘇生法を学ぶ
	(3)テーマ別発表（小学校6年生）	○小学生の発表に対する質問や意見・感想などを発表	○（6年）各自が興味を持った防災に関するテーマについて調べたことを発表	○小学生の発表に対する質問や意見・感想などを発表	○小学生の発表に対する質問や意見・感想などを発表
14：30	**⑥ 振り返り**				
	(1)参加主体ごとに振り返り	参加主体ごとに、良かった点や改善点を振り返り			
	(2)全体で振り返り	中学生が司会として全員で良かった点や改善点を振り返り			

自主防災訓練を通した小学生・中学生の共通目標

防災に関する課題を地域の人々と共有し、自分たちが地域の一員として防災のために何ができるのかを考え、地域の人々などに助けてもらうこと、自分たちでもできること、自分たちにしかできないことを判断して、行動していけるような資質、能力を身につけることができる。

自主防災訓練を通した小学生・中学生ごとの個別目標

小学生：中学生や地域の人と一緒に自主防災訓練を計画・運営することができる。

中学生：自分たちでできることを考え判断し、主体的に自主防災訓練を計画、運営することができる。

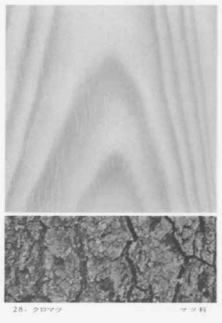
仏像は何の木でできてるの？ ～ いっしょに考えてみよう! ～

仏像の木目と色を観察すると、針葉樹に絞れたよ!

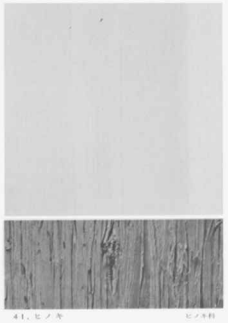
この像の手をかくだいすると…

針葉樹の例

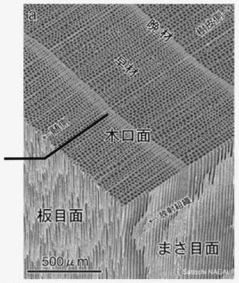
カヤは木肌が黄味ががっている。またかたいので、細かい彫刻に向いている。



クロマツは高田松原にも植わっている。針のような形の葉を持ち、樹脂が多く含まれる。



ヒノキは仏像彫刻に使用する木材として最もよく使われる。柔らかく、彫刻しやすい。



仮道管

(例) 走査電子顕微鏡(SEM)で見た針葉樹材(ヒノキ)の構造

教科書で針葉樹や木材について調べてみよう!!

あなたの予想は…?

◎常膳寺 …

◎長谷寺 …

常膳寺の姥杉

杉は針葉樹の一種。常膳寺の石段を登り切ると、「姥杉」と名付けられた大木が見られる。高さは約35mあり、樹齢は約600～700年と推定される。

Q. aとb どっちが古いかな?

(1)常膳寺千手観音菩薩立像

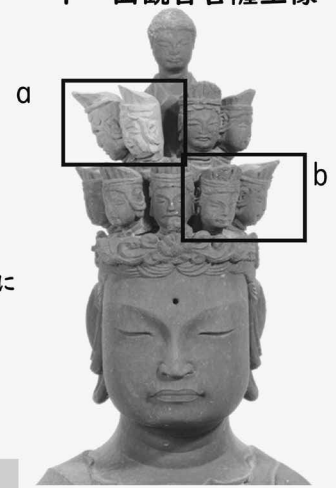
a

b

仏像が作られた当時のパーツと、後の時代の人が修理のためにつけたパーツがまざっています。

仏さまを直しながら、大切に受けつがれてきたことがうかがえます。

(2)向堂観音堂 十一面観音菩薩坐像



長谷寺聖徳太子立像

これは有名な聖徳太子のすがたではなく、16さいくらいのすがたです。

お父さんの病気が治るようにお香を持っておいのりをしています。

陸前高田市・住田町・大船渡市の仏像を見てみよう！

常膳寺千手観音菩薩 立像

住所 ：岩手県陸前高田市小友町 字上の坊二四

常膳寺境内のようす

向堂観音堂十一面観音菩薩 坐像

住所 ：岩手県気仙郡住田町 世田米字川向

※現在仏像は浄福寺管理

像を管理している浄福寺境内のようす

長谷寺聖徳太子立像

住所 ：岩手県大船渡市猪川町 長谷堂一二七

長谷寺境内のようす

12 長谷寺聖徳太子立像像底

9 長谷寺聖徳太子立像頭部正面

10 長谷寺聖徳太子立像頭部右斜側面

11 長谷寺聖徳太子立像頭部右側面

6 長谷寺聖徳太子立像全身左側面

7 長谷寺聖徳太子立像頭部左側面

8 長谷寺聖徳太子立像頭部左斜側面

2 長谷寺聖徳太子立像全身右斜側面

3 長谷寺聖徳太子立像全身右側面

4 長谷寺聖徳太子立像全身背面

5 長谷寺聖徳太子立像全身左斜側面

1　長谷寺聖徳太子立像全身正面

品質構造

広葉樹。散孔材。道管が散在し、像表面に細線状にあらわれる。クスまたはサクラか。木芯を袴前寄り中央やや左に込める縦一材より彫出。内刳りを施さない。

この頭体幹部に、角髪(現状亡失。両耳前に撥形の削平部を作り、矧ぎつけていた。)・両手先・両沓先を別材矧ぎとしていた。像表面は白地とし、当初は彩色を施したか。(頭髪は黒、他の部位は色不明。)

造立年代

室町時代(十五～十六世紀)と推定

備考

一、実査　令和六年(山岸公基・広野祥子・金川恵人・山本隆萬)

聖徳太子立像

岩手県大船渡市猪川町字長谷堂一二七　長谷寺

木造　素地　一軀　像高一六三・〇cm

形状

耳以上の頭髪は彩色であらわす。当初は両耳前に角髪を垂らしていたと推定される。後頭部以下に髪を長く垂らし、腹帯の下層に至る。鼻腔を窪ませる。袴・盤領の衣・腰帯・袈裟を各付ける。盤領の衣は、両手首より大袖の衣状に垂下するが、下端が袋状にならない。背面にあらわされる腰帯はこの盤領の衣を締めるか。盤領の衣は、背面では地着に至るか。袈裟左腋より右脇腹に掛けて懸ける。衣縁は、袈裟か。盤領の衣の上層だが、背面にはあらわされない。両腕ともに、屈臂して前に出す。（左右ともに手首先亡失。）両足をやや開き、身体を前傾させて立つ。台座は宣字座。腰部正面格狭間に菱花を繋ぐ文様。下框には、四隅並びに正面中央に脚を設ける。

法量（単位cm）

本体

像高	六六・〇（二尺一寸）		
頂―顎	一四・五		
面幅	八・六	耳張（耳垂）	一一・二
面奥（鼻先水平）	一一・七	胸奥	九・六（背面で髪を含む）
肘張	一九・〇	袖張	二〇・一
裾張	一八・一		

台座

高	一一・八	最大奥	三〇・四
最大張	三七・一		

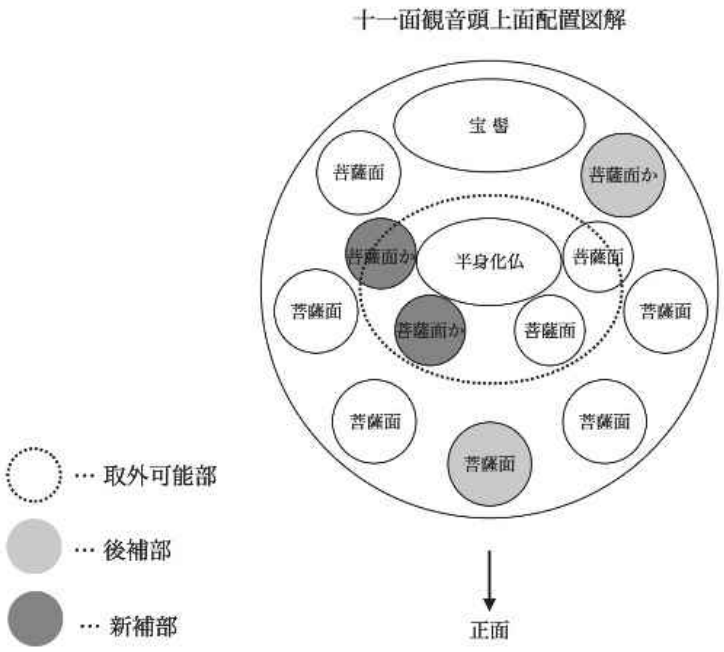


図１　向堂観音堂十一面観音坐像頭上面配置図

12 向堂観音堂十一面観音坐像頭部右側面

13 向堂観音堂十一面観音坐像頭部右斜側面

14 向堂観音堂十一面観音坐像頭上面（頭頂より）

15　向堂観音堂十一面観音坐像像底

16　向堂観音堂十一面観音坐像両脚部上面

9 向堂観音堂十一面観音坐像頭部左斜側面

10 向堂観音堂十一面観音坐像頭部左側面

11 向堂観音堂十一面観音坐像頭部正面

6 向堂観音堂十一面観音坐像全身左背斜側面

7 向堂観音堂十一面観音坐像全身左側面

8 向堂観音堂十一面観音坐像全身左斜側面

2 向堂観音堂十一面観音坐像全身右斜側面

3 向堂観音堂十一面観音坐像全身右側面

4 向堂観音堂十一面観音坐像全身右背斜側面

5 向堂観音堂十一面観音坐像全身背面

1 向堂観音堂十一面観音坐像全身正面

像表面は、当初より素地または素地地色彩色とされたとみられる。
像底に、頭体幹部材に一、両脚部前半材に二の丸枘穴がある。当初の本体・台座の緊結に関わるとみられる。

保存状態

上段頭上面のうち右二面、下段頭上面のうち左端一面および中央一面、光背(木造漆箔)、台座(木造漆箔)、以上後補。
白毫、裳先、両手持物、天冠台および臂釧の花飾り部、天衣垂下部より腰布から地付に至る部分、以上亡失。

銘記

［台座天板底面墨書］
作者　京大佛師
旹元禄九年丙子歳　四條通
長兵衛
従四位中将
松平陸奥守綱村公御治世
秋七月廿日
施主気仙郡世田米村中澤
（異筆）松田市郎左衛門尉義廣
［光背嵌入鏡背陽鋳］
藤原光重

備考

一、実査　平成二五年八月二八日（山岸公基・中澤静男・木谷智史・千々石喜一・土海稚奈・英優美・二階堂泰樹・横井まどか）。令和六年九月一二日(山岸公基・広野祥子・金川恵人・山本隆萬)

法量（単位cm）

本体

像高	二九・八(九寸八分)		
髪際高	二〇・五(六寸六分)		
頂―顎	一六・〇	面長	五・七
面幅	五・七	耳張	七・三
面奥	七・八	肘張	一四・八
坐奥	一四・六	膝張	一九・九
膝高(左)	四・三	(右)	四・四
台座高	二〇・〇		
光背高(現状)	三九・二		
厨子高	七五・五		

品質構造

本体

針葉樹。目がよくつまる。材色が黄色味を帯びる。榧か。

頭体幹部は、髻頂よりやや(一・八㎝)下から像底に至るまで、両腕肘まで、両腰脇三角部と両脚部後半まで、および右天衣遊離部、左右天衣垂下部の遊離する部分までを含んで、木心を像の後方遠くに去る竪一材より彫出し、内刳を施さない。(右体側部と右腕間、両腕膊と両脚部との間を、トンネル状に刳り透かす。)

この頭体幹部材に、頂上仏上半身(高さ八・三㎝。周囲に上段頭上面四を矧ぐ。仏面三道第二条より上を矧ぐ。頭体幹部とは丸雇枘で緊結する。)、髻頂、地髪部上頭上面(七面)、天冠台および臂釧花飾り突出部、両手首先、両脚部前半、裳先を各矧ぐ。白毫別材製。現在胸飾の天衣と接する部分に環状の金具が遺り、左にも環状金具を差した痕跡がある。別材製瓔珞を懸けたか。

十一面観音菩薩坐像

岩手県気仙郡住田町世田米字川向　向堂観音堂

木造　一軀　像高二九・八㎝

形状

頭上に十一面をあらわす。頂上仏面には、上半身をあらわし、左肩を覆い右肩に浅く掛かる形の大衣を着け、右胸を下衣で覆い、拱手する。髻中段に四面、地髪部上に七面の頭上面をあらわす。(頭上面は計一二面となる。)当初の頭上面には、表情の違いを見てとることはできない。頭頂は円頂に近く、髻を認めることはできない。髻台下正面のみ斑彫り、他は平彫り。天冠台は紐二条で中段の左前下段の左中央部には、天冠台正面に円形飾をあらわす。宝冠は山形で、縦方向に筋彫りをあらわす。頭上面のすべてに三道相をあらわす。髪は正面束目入り毛筋彫り、背面平彫り。髻は、頭頂仏面の上半身背面にまで立ち上がり、上端に一、側面に各二の髪房を垂らす。背面側では、髪際が彫りあらわされない。鬢は、二条耳を渡る。天冠台は、列弁文・紐二条・列弁文。(背面では列弁文の彫り省略。)天冠台正面に花文を中心に、左右に各三の蕨手および蓮蕾状飾をあらわす。両耳上に各一の円形花文(中央に小枘穴、元冠繒の結びを差したか)。白毫(亡失)は、耳垂、環状貫通、三道相をあらわす。条帛・裙・腰布・天衣を各付ける。条帛は左肩から右脇腹にかけて掛け、左胸上で一端を上端より折り込み下端にし、地にのぞかせ、腹前で上端より垂らす。その先端は、右足首におよぶ。もう一端は左肩後ろで下端より垂れ、その先端は地着におよぶ。裙・腰布はやや整合性が不足する(両腿側面では、縁の房飾りが裙の上層にあらわされるが、右足裏を覆う部分では、下層に房飾りがあらわされており、背面では裙の上層の布のさらに上層にあらわされる。)天衣は抜衣文風に襟足をくつろげて両肩に掛け、左肩より垂らす部分を下にして両脚部を二段に渡り、各々逆側の前膊(左は肘先、右は手首近く)に掛け、外側に垂らして終わる。胸飾は、概形が三張形となり、基本帯紐三条、正面中央に花飾、左右に各一の蕨手をあらわす基本帯飾。両肩で天衣の下層に左右各一の円形飾の一部があらわれる。臂釧は基本帯紐繋・副帯一条。基本帯の外側に各一の円形花飾(中央に枘穴があり、副帯の結びを枘差しとしたか)。腕釧は紐二条。右腕は、肘をやや屈して右膝上で第一、三指を捻じ第四指を添え、第二、第五指を伸ばして持物を取る形。左腕は肘を強く屈して左肩前で第二・三指を捻じ第三・四指を添えて握り(第五指を伸ばす)、持物を取る形。右足を上に半跏趺坐する。

14 常膳寺十一面観音立像光背

11 常膳寺十一面観音立像頭部正面

12 常膳寺十一面観音立像頭部右斜側面

13 常膳寺十一面観音立像頭部右側面

6 常膳寺十一面観音立像全身左側面

9 常膳寺十一面観音立像頭部左側面

10 常膳寺十一面観音立像頭部左斜側面

2　常膳寺十一面観音立像全身右斜側面

3 常膳寺十一面観音立像全身右側面

4 常膳寺十一面観音立像全身背面

5 常膳寺十一面観音立像全身左斜側面

1　常膳寺十一面観音立像全身正面

で正面から見える)、後面材の肩から腰下にかけてさらに背板を矧ぐ。

両肩以下別材。現在合掌する手は肘、手首で矧ぐ。この手は古写真で同位置に構える手と同一かと見られるが、合掌する左右の手先を別材で造っており、現在掌間に開きがある。

合掌手と宝鉢手は共木の上膊部を前中後の三列にまとめて各一材を矧ぎ、それぞれに各臂の肘先を矧ぐ。両足先矧ぎ付け。

伝来

一、常膳寺観音堂前立尊として伝来した。

保存状態

本体　天衣垂下部、上背部に打つ左右一個の壺金具、脇手の一部、以上後補。

台座　後補。

備考

一、実査　平成二年八月(山岸公基)。平成二四年六月二三日・二四日(山岸公基・加藤久雄・中澤静男)。九月七日・八日(山岸公基・中澤静男・宮武杏名・小松原絵里・新宮済・中澤哲也・古川真理奈・幸田早苗)。令和六年九月一一日(山岸公基・大西浩明・中本篤志・苗代昇妥・広野祥子・金川恵人・山本隆萬・谷山陽輝)

参考文献

『平成二六年度　奈良教育大学　地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト』報告書（平成二七年三月、国立大学法人奈良教育大学）

本体

像高　一六三・〇(五尺三寸八分)

本体最大高　一七二・四　(左上に差し上げた脇手上端より地付)

髪際高　一四〇・五(四尺六寸四分)

面長　一六・〇　面幅　一四・五

耳張　一八・五　面奥　一九・〇

胸奥　二四・〇　腹奥　二二・八

合掌手肘張　三九・五　脇手最大張　九四・六

裾張　四二・二　足先開外　三三・八

足先開内　二一・九

光背

高　二二三・五　最大張　一三一・〇

二重円相部高　一四五・〇　頭光径　五一・五

身光張　六五・五　光脚高　二〇・〇

光脚張　六三・三

台座

高　五四・一　最大張　一〇一・五

最大奥　八一・六

品質構造

本体

針葉樹。榧か。寄木造り。素地。

頭体別材・頭部は両耳上を通る線で前後二材、別に後頭部に背板一材。体部は両肩前を通る線で前後二材(したがって前後矧ぎ目は両肩前

千手観音菩薩立像

岩手県陸前高田市小友町字上の坊二四　常膳寺

木造　素地　一軀　像高一六三・〇cm

形状

本体　髻頭に頭上面を表さない。髻周囲の環状の髪束に四面、地髪部に七面をあらわす。(地髪部七面のうち正面中央一面のみ作風が異なり、古いか。)頭髪は束ね目入りの毛筋彫りとする。鬢髪二束が耳をわたる。天冠台は紐二条の上に列弁文、正面・両耳上でその上層に菊座をあらわす。白毫相をあらわす。鼻孔を穿つ。三道相をあらわす。現状五十二臂を数えるが、左右で臂数を異にしている。当初は四十二臂か。条帛・天衣を懸け、裙・腰布を着ける。条帛は左肩より右脇腹にかけてかける。左胸上で上端より折り込み、下端より垂らす。垂下部下端は裙折返し部上層におよぶ。裙は右前に打ち合わせ、上縁を折返し(折り返し部は左前に打ち合わせ)、両脛脇にたくれをあらわすが、たくれ部は左右とも小放物線状を示す。腰布も右前に打ち合わせ、両腰脇より背面にかけて腰布の上層に下縁が弧状になる衣があらわされる(これは腰布の折り返し、または帯状の布か)。天衣は合掌手の両肩を覆い、前側では脇手の一部の肩部分を覆う。背面では左右の縁が脇手に及ばず、下端は腰上に至る。背面では下端で、反った天衣の裏にも衣文を彫る。十一面観音菩薩像の左手首内側に垂下する天衣は、もと本像の合掌手右肘より外に垂下する部分であったか。臂釧は、基本帯は紐・珠繋・紐で帯一条の副帯をわたし、合掌手にのみあらわされる。基本帯の外側にはもと基本帯飾を貼った痕跡があり、また基本帯飾中央には、さらに別材の飾り(副帯の結びか)を枘差しした丸枘穴が残る。腕釧は合掌手では列弁・紐二条・列弁とする。両足をやや開いて直立する。

光背　二重円相光。頭光は中心に八葉蓮華をあらわす。圏帯は内縁、外縁とも紐・珠繋・紐を配し、無文。身光は中央を空とする。圏帯も内縁、外縁とも紐・珠繋・紐を配し、無文。光脚は仰蓮・反花・蕊から成り、仰蓮・反花は七弁(仰蓮は二重間弁付)とその間の蕊をあらわす。周縁部は概形蓮弁形、外縁圏帯が紐・珠繋・紐。内区は上半に雲、下半に唐草を配す。

台座　蓮華四重座　(仰蓮・敷茄子・反花・框座)。

法量(単位cm)

可能性を指摘できよう。ところで延暦寺講堂は、明応八年（一四九九）に根本中堂などとともに焼失した（『御湯殿上日記』ほか）。常膳寺十一面を造立した仏師の気仙地域における活動期と推定された一四六九～一五一〇の間に、延暦寺講堂の焼失という事件が起こっていることは看過できない。常膳寺十一面は陸前高田市観音寺の十一面観音菩薩立像（平安時代後期の作とみられるが後補が著しい）、大船渡市長谷寺の十一面観音菩薩立像（平安時代後期）とならんで「気仙三観音」と称され地元の信仰を集めるが、同時に現存しない延暦寺講堂像を気仙の地に再興しようとする事業であったとも考えられる。鎌倉時代～室町時代の陸前高田市・住田町地域に宗主的な支配権を及ぼしていた葛西氏一族は、和歌山・熊野速玉大社蔵の『葛西一族等奉加帳』「永正年間（一五〇四～一五二一）頃」によれば熊野速玉大社に柱をはじめ多くの奉加を行うなど、陸奥国内に留まらない活動を行っていることもあわせ留意されよう。

以上、今年度の常膳寺千手・向堂観音堂十一面の再調査を機会として、西暦一五〇〇年前後に気仙の地で活動した仏師の事蹟について、やや大胆な推測も交えて実像を明らかにすることに努めた。ただし常膳寺千手や向堂観音堂十一面の、高い髻が背面側で地髪部へと段差を設けずなだらかに推移する形状が福寿庵聖観音に類すること、常膳寺十一面の胸腹部の肉取りが、常膳寺千手や向堂観音堂十一面よりも福寿庵聖観音に近いこと、沙田家懸仏の大衣をつける衣制が福寿庵聖観音と共通することなど、在地における造像の伝統が前掲六作例の造形に浸透していることも否みがたい。新出作例の博捜等により、今後も当地域の造像史の明確化に向けて努力を傾注したい。

参考文献（抄）

・陸前高田市史編集委員会編『陸前高田市史』第一～第十二巻　（平成三年三月～平成十四年三月、陸前高田市）
・奈良教育大学『奈良教育大学　陸前高田市文化遺産調査報告書　二〇一二年度―二〇一四年度』（平成二十七年三月、奈良教育大学）
・奈良教育大学『奈良教育大学　陸前高田市文化遺産調査報告書　二〇一五年度―二〇一七年度』（平成三十年三月、奈良教育大学）
・津田徹英「十一面観音像が戴く異形の頂上仏面」（津田徹英『平安密教彫刻論』所収。平成二十八年二月、中央公論美術出版）
・入間田宣夫編『葛西氏の研究　第二期　関東武士研究叢書3』（平成十年六月、名著出版）
・奈良国立博物館編『室町時代仏像彫刻　在銘作品による』（昭和四十五年三月、奈良国立博物館）

される)、その仏師の気仙地域における活動期は、福寿庵聖観音と鵜住居観音堂十一面の造立年の間の四十年ほどが目安となると考えられるのではないだろうか［鎌倉時代初期の著名仏師運慶（?～一二二三）の現存作例が、一一七六～一二一六の四十年間にわたっていることも参考になろう］。活動期に当たる四十年の間に、運慶の場合個人様式に変遷があったことが知られるが、前掲六例についても相対的に年代順を推定することではじめて、当地での仏師の具体的活動の様相が浮かび上がってくる。

前掲六作例のうち、制作がもっとも遡ると考えられるのが常膳寺千手である。以前提説したように常膳寺千手の垂直性の強い裙・腰布の布帛表現は鎌倉時代・貞応三年（一二二四）肥後別当定慶作の京都・大報恩寺六観音像などに淵源しており、仏師は中央での修業を経た人物と考えられる。常膳寺千手の頭上面のうち、地髪部正面中央一面のみ作風が異なり、鎌倉時代に遡る作とみなされ、かつ地方色を認めがたい。中央での修業に際して師から伝授されたと推測できるのではないだろうか。常膳寺不動（像高七四・〇㎝）・毘沙門（像高七二・三㎝）両像はいずれも小ぶりな三尺像で、等身の千手（像高一六三・〇㎝）の両脇侍として法量もふさわしく、同時期に造立されたと考えるのが自然である。

ところで常膳寺千手と向堂観音堂十一面はいずれも十一面を意識したとみられる多面の像だが、通常十一面観音菩薩は前に菩薩面三面、左に瞋面三面、右に牙上出面三面、後ろに大笑面一面、頂上に仏面（もしくは仏面像）一面と、五種類の頭上面を持つのが定式であるのに対し、常膳寺千手ではすべての頭上面が菩薩面（仏面も表わされない）、向堂観音堂十一面でも上半身まで表現された仏面のほかはすべて菩薩面とみられる（沙田家懸仏は小像であることもあり頭上面に目鼻立ちが彫刻されておらず、現存六面に彫りの差異は認められない）。憶測をたくましくするならば、このように経軌を無視したともとれる図像となっている背景に、仏師としては壇越に対して中央の作風への習熟のさまを示すという目的が優先され、事相に詳しい僧侶の介在がなかったとも考えられよう。仏面に上半身が伴う向堂観音堂像のような十一面観音菩薩造像例は、滋賀・生源寺像（平安時代後期）のように中央にもあるが、平安時代前期の山形・宝積院像をはじめ福島・法用寺像、茨城・西光院像（いずれも平安時代後期）など東国、とりわけ東北地方（旧陸奥・出羽両国）に多く、円仁開創伝承との関係で天台宗の伝播と結びつける意見もある。向堂観音堂十一面の基本的に素地とする表面仕上げや天衣遊離部・垂下部まで本体材から彫出する木取り、天冠台・胸飾・臂釧を共木で鏤刻する手法は平安時代前期の檀像風彫刻に例が多く、手本とした平安時代前期彫刻が存在した可能性も考慮に値しよう。

前掲六例のうち、頭上面に菩薩面・瞋面・牙上出面・大笑面の表情の差が明確に認められるのは、常膳寺十一面のみである（ただし配置は伝来過程でおそらく改変されている）。常膳寺十一面の三二五・〇㎝という法量は、像高一丈五寸（『叡岳要記』）とされる比叡山延暦寺講堂十一面観音菩薩立像（現存しない。以下延暦寺講堂像と略称）と誤差の範囲であり、また延暦寺講堂像も頂上仏面に拱手する仏身を表現していた（『類秘抄』・『覚禅鈔』ほか）。常膳寺十一面の場合は、オーセンティックな十一面観音菩薩の図像を求めて延暦寺講堂像に倣うこととした

陸前高田市常膳寺の千手観音菩薩立像と気仙郡住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像をめぐって

～陸奥国気仙郡の仏像史序説～

奈良教育大学教授　山岸公基

令和六年九月の奈良教育大学陸前高田市文化遺産調査では、陸前高田市常膳寺の千手観音菩薩立像（以下常膳寺千手と略称）・気仙郡住田町向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像（以下向堂観音堂十一面と略称）・大船渡市長谷寺の聖徳太子立像を主な調査対象とした。常膳寺千手は平成二十四年、向堂観音堂十一面は平成二十五年に調査を行い、結果をすでに報告している（ただし基本的データに補正を加えて本報告書でも報告を行う）が、足掛け十三年間にわたる陸前高田市・住田町・大船渡市など旧陸奥国気仙郡地域における調査と各論的な報告をもとに、この地域の仏像彫刻の様式展開について、通史的な総論を逐次示すべき段階になっているといえよう。常膳寺の十一面観音菩薩立像（以下常膳寺十一面と略称）をはじめとする仏像群の東日本大震災後の状況確認が本調査のきっかけであったこと、調査の過程で常膳寺十一面・千手ならびに不動明王立像（以下常膳寺不動と略称）・毘沙門天立像（以下常膳寺毘沙門と略称）が、向堂観音堂十一面とともに室町時代、十五世紀末～十六世紀初の同一仏師もしくは同一工房の作であると確実視されるにいたったこと、にもかかわらず、平成二十七年に常膳寺十一面が県文化財に指定された後も同寺の千手・不動・毘沙門は未指定のままで正当な評価が待望されることから、常膳寺千手・向堂観音堂十一面の再調査を通じて、この地の仏像彫刻の歴史のなかでも特筆される西暦一五〇〇年を前後する時期の造仏について従来よりも踏み込んだ見通しを示し、通史の一部としたい。

常膳寺十一面・千手・不動・毘沙門、向堂観音堂十一面、及び平成二十六年に調査した現沙田家（廃東岸寺。旧黒崎神社）十一面観音菩薩坐像懸仏（以下沙田家懸仏と略称）の六作例は、同一仏師または同一工房の作と考えられ、沙田家懸仏が明応五年（一四九六）の銘記を伴うことから、平成二十七年三月発行の『奈良教育大学　陸前高田市文化遺産調査報告書　二〇一二年度―二〇一四年度』では十五世紀後半を前後する頃の一連の造像と考察した。ところでその後平成二十九年の調査で陸前高田市福寿庵の聖観音菩薩坐像（以下福寿庵聖観音と略称）に応永三年（＝文明元年、一四六九）の銘記が見出され、また釜石市鵜住居観音堂十一面観音菩薩立像（以下鵜住居観音堂十一面と略称）の永正七年（一五一〇）銘が知られるなど、気仙・閉伊地域の十五～十六世紀の造像例は次第に増してきているが、福寿庵聖観音や鵜住居観音堂十一面と前掲の六作例とは、図像や形式の細部に共通性が認められるものの、同一仏師ないし同一工房作とは作風上考えられない。前掲六作例を同一仏師の作と考えるならば（若干の小仏師を伴う工房作としても、作風は大仏師の個性に依拠することが、鎌倉時代の工房作から類推

岩手県陸前高田市常膳寺・
気仙郡住田町向堂観音堂・大船渡市長谷寺
仏像調査報告書

2025 年 3 月

奈良教育大学

令和 6 年度　奈良教育大学
陸前高田市文化遺産調査報告書

令和 7 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学
ESD・SDGs センター
〒630-8528　奈良市高畑町
TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147（教育研究支援課）